

# 第25回 特別研究会

## 内側からみる

佐伯 胖

1991年 3月20日 南山短期大学にて



## 内側からみる



### 佐伯 胖（さえきゆたか）

1939年 岐阜に生まれる。  
1964年 慶応義塾大学工学部管理工学科卒業  
1970年 ワシントン大学大学院心理学専攻、Ph.D  
現 在 東京大学教育学部教授  
専 攻 認知科学、教育方法論  
著書：『コンピュータと教育』『「わかる」という  
ことの意味』『認知科学の方法』他

中野

それでは今日は東京からきていただきました佐伯先生に「内側からみる」というお話を90分ほどしていただいて、それから休憩を取りまして、その後質疑とか意見交換をするということで進めさせていただきます。佐伯先生については竹内さんの方がよくご存じなので佐伯先生について簡単なご紹介をしていただけたらと思います。

竹内

佐伯先生は率直な方だから自己紹介をしると言ったらして下さるんじゃないでしょうか。（笑）私が初めてお目にかかったのは10年くらい前に金沢の教育心理学会のシンポジウムで御一緒して、その時の話しは私は非常に面白かったです。自分が考えていたのとまるで違うところから、妙なところから話しかけられたという感じで。その後いろいろ気にはしてたんですが余りお近付きにはならなかった。ところで、その頃は東京工大におられましたか？

佐伯

いえ、東京理科大です。

竹内

理科大。それから東京大学の教育学部に迎えられて、その時私は佐伯先生というのはどういう人だかよく分からないので稲垣さんに、もともとどういう研究をしてらした方ですかときくと、コンピュータの研究だという。但しコンピュータの研究といっても、コンピュータではできない、人間でなければできないことは何かという風に考えてらっしゃる方だということでした。ここでも、そういう紹介の方が皆さんには一番いいかと思います。それから後で教育学部の、授業の研究スタッフといいますか、そういった話で認知科学——私は認知心理学ということはよく知りませんけれども、それが発展して認知科学ということ

にもなっているようですけども——その日本におけるリーダー格と云うかそういう方なのです、と言う程度のことしか言えません。あとは非常に個人的に私が佐伯さんとなんべんか授業の研究會みたいところで、人が何かを学ぶということについての知見というのに非常に精細で明確であるということに私は心打たれる。それと同時に、例えば一つの文章を読まれたときに感受性が非常に澄んでいる、それが非常に私には感銘が強い。今日もそういうお話が伺えるんじゃないかと期待しているわけです。

## 1. 私にとっての問題史

理系か文系か

佐伯

自己紹介というのも何なんですが、私は慶応大学の工学部で、管理工学というところをでまして、まったくですから、人間のことは縁のないというか。——でも、縁があるのではないかと思って入った大学だったんですけどね。というのは、私は高校時代は、人間にも関心があって、哲学とか心理学みたいなことに非常に関心があったんですけども、一方でやっぱり数学とか物理とかが好きだったものでどっちの方にいこうかなあなんてひどく悩んでいたんですね。で、そういったときに、これは全く偶然で（その成行きについてはちょっとご説明できないんですけど）霜山徳爾先生とある機会にお会いできたんです。その時に僕がそういう悩みを話しまして、文化系に行くべきだろうかそれとも理科系に行くべきだろうか、こう聞いたら霜山先生が、言下のもとに、理科系に行きなさいと、心理学や哲学は自分で出来ます、しかし物理やら工学は人から教わらないとできないことだ、と。まずそれをやりながらやっぱり人間についてずっと考え続けていくのが一番いいんじゃないかと、こういう風に言われたんです。

それで僕はどこへ行くべきかということでもいろいろ悩んでいたんですけども、たまたま慶応大学で管理工学科というのが出来たんですね、でその時のキャッチフレーズが、わが学科は文化系と理科系を統合する学科であると。（こちらの南山さんも経営工学とかなんとかおっしゃるときはそういうことをいうのかも知れませんが、ま、その頃は経営工学とかなんとかいうのは世の中になくて、管理工学科っていうのが初めて出来たんですね。でその時に、文化系と理科系を統合するのであるっていうことですね。）そして、工学者としての、機械工学だの、電気工学だのやれば、一方では心理学とか社会学とか経済学だとかもやると。そういうことで、その両者を統合するのであるというので、あっ、これしかないということで僕はまあ入ったんです。入ってはみたものの、それはぜんぜんそういう感じがなくて、心理学といっても計量心理学ということで統計みたいなものばかりですね。そういう先生にいろいろ僕は質問にいったことがあるんですよ。つまり、企業のなかで人間がどうも人間らしくないような

感じがすると。まあ一方ではエイリッヒ・フロムとか読み親しんでいたもので、なんていうのかな、産業社会なりオートメーション化なりそういう企業のシステムの中で人間が人間らしくなくなるという話があるんだけど、ただで習う授業は全部そのオートメーションは実質業でありね、そして能率化は重要であり、作業はきちっと標準化しなければならないっていうことでありね、そして心理学は人間の作業の情報量っていうのをビット——その頃情報理論っていうのが盛んですからね——情報量、どんなタスクは何ビットであるとかなんとか、そういう、タイプライターを打つときは何ビットだ、とかそんな話ばかり。で、これでいいのか、なんかちょっとおかしいなと思ったのでそれで先生に僕は質問にいてですね、どうも僕はいろいろエイリッヒ・フロムだなんだ読んでみるとこういうことは人間にとってよくないっていう話なんです先生どういう風にお考えですか？ってこう聞いたらね、私は心理学のことは分かりませんってこういうんです。(笑)これはえらいこっちゃ。こっちは分からないから、向こうは心理学者だということなんで聞きにいったら、私は心理学のことが分からないと、こうおっしゃってですね、それで困ったなあと思ってそれが積もり積もって大学の3年生くらいの時に、このまま後は卒論だということで、卒論になると私は、心理学系ということで、浦庄司というですね、一対比較法という統計的な尺度法なんです、それを発明された有名な統計学の、(もともとその先生は計算機関係の先生なんですよ。)その先生の所に、ま、心理学だとあの先生しかないっていわれて、その先生のもので卒論を書かなきゃなんないことになった。その先生のゼミは、もう心理学のシの字もなく、機械語でプログラムを書くような、もうみんなそのゼミナールの学生は、2ビットで話しろと、何かこう、(笑)1, 2, 3, 4, 5, 6, 7 8 9 10……って数字を全部2ビットで全部覚えるというそういう具合に機械語で書くんですよ。で、僕はそのプログラムは分からないといったら、FORTRANとかいう言語をいま彼らがコンパイラつくっているから、彼らがつくったマニュアルを君、読んで勉強せいと言われて彼らがつくった、ガリで書いたやつを読んで、僕らは学生がつくったプログラムでもって、自分の卒論を書かなきゃなんない。でまあ、こういう状況だったんですね。だけどそんなんで人間について考えたいなんていっててもそんなん何もできないで終わっちゃいますからね、こりゃ困ったなと思って、でやっぱり、一大決心して1年間自発的に留年したわけです。単位は足りてたんですけども。4年生になるのは嫌だということで、あえて必修科目を意図的に落として4年にならなかったんです。で、それで1年間僕は自分でとことんまで考えたいということで、いろんな本を読んだりですね、そして、三田の僕らは小金井という、武蔵小金井というずっと辺りな所にある、藤原記念工学部とか、(もとは、藤原銀二郎という人がつくった藤原工業大学というのが慶応と合併したんですよ。で、そこですから、校舎といっても工場ですね、ま、いわゆる兵舎みたいな。(笑))そういうようなところに



下駄ばきで非常に気楽にいったんですが、いよいよ、僕がそういうことに悩みましたんで、三田の文学部だとか哲学みたいなのところにもう一度、(教養の頃ちょっと顔を出したことがあるんですがね、教養の頃も日吉でしたからね、三田っていうと、なんか、こう、文化の殿堂という感じで僕ら遠かったんですよ。)でもそこへ乗り込むしかないということで、つめえりとどろどろのYシャツが首からこうでているような、下駄ばきですね、それで、カランコロンと三田へ行って、そこで会う人、会う人に、僕は、工学部からきた男であると、で、人間について悩んでおるのであると(笑)、誰かいい先生を紹介してくれんか、こういうことでいろいろ言ったらですね、まあ、ある哲学の先生の所へ紹介されて行ったのですよ。それは、沢田允茂さんという先生。そしたらですね、あ、君いい所へきた。僕はこれから哲学はやっぱり数学でないといけなと思ってて、とこういうんですよね。(笑)それで、君、記号論理学をやりたまえ、ぼくは、サイバネティクスこそが、これからの哲学だと思うっつって、三田哲学に書いた彼のサイバネティクスと存在論とか何とかっていう論文を読まされましてね。んーっと一所懸命読んだけどどうも解らない。それで、なんか話がおかしいなっていう感じだったんです。

村井実の授業で  
のショック

そしたらもう一人の西村さんというまだ助手くらいでおられた先生が、ま、今から思えば、それはディルタイをやった先生なんです、その方が、村井実という先生がアメリカから帰ってきて今度授業やるからそこに君はでたらうだ、というわけですよ。で、村井実ってのはどういう授業をするか、なんも知らなかった。何の科目の先生かも分からずに、何番教室で今度アメリカから帰ってきた村井実っていう人が授業やるから、君でてこいっていうからとにかく行ったわけです。何の授業か分からない。で、行ったら、その先生がきたら、おっですね、やあってなことで、座ったら、(僕これなんの授業が始まるか全く分からなかったんですけども、)突然、お、きみ、歴史って繰り返すと思うかね、とこう言うんですよ。何なんだろう、歴史ですか?僕は、また、一番前にいたもんで、歴史って考えたことないです、って言ったら、ほうかね、きみ、歴史っていろいろあるだろ。そういう事を、きみ、考えたことないかね、なんて言われてですね。そうすね、歴史ですか?歴史って僕は考えたことないですけど。ん、じゃあまた後で聞かよ。じゃ、その次の人。君は歴史って繰り返すと思うかねってなこんな事聞いて、で、一時間近くずっとそうやって聞いているだけなんです。で、なんにも村井さん言わないんですよ。どういうことなのかなって思ったら、最後のほうになってね、歴史って繰り返すのかなあ、それとも、繰り返さないんだろうかなあ、って自分で言い出してね。それで、トインビーっていう人はなんか繰り返すなんて言ってるよ。どうだい君らは、といて、また話が。で、何の授業かなと思ってたんですよ。で、人に聞いたら、それは教育史って言う授業なんですね。だけど全然僕は分からずに出たら、そういう事で、訳わからないけど僕は非常なショックだったんですよ。何がショッ

クだったかという、僕は、工学系の授業に出てたわけですけど、工学部の先生と言ったら、入ってきたら、もう数式を黒板にぶわーっと書いてそれを人が写しきれないだろうという想像のもとに、ぶわーっと消していくと、それを命がけで写すという、そういう授業だったもんで、歴史って繰り返すのとかなんとかそんなこと授業で言われて、なんかなるのかなあと僕はものすごいショックだったんですね。

竹内

村井さんがそんな面白い人とは思わなかったなあ。

佐伯

それで、その先生の授業が終わったときに、「僕はなんか解らないけれども眼鏡かけた先生にお会いしたらその先生が村井さんの授業に出ろっていったからでた。で、授業にでたら、よくわからんけど非常にショックを受けて、何か僕が求めていた世界があるんじゃないかと思う。」とこう言ったらですね、「君は教育学についてなんか本を読んだ事があるか。」とこう聞かれたんですよ。それで僕は偶然ですけども、《アメリカ教育使節団の報告書》というのを何故か昔チラリと読んだ事があって、「それを読んだ事があります、他はありません。」とあったんですよ。「それは良かった。じゃあ出たまえ。」っていったんですよ。で、それもね、後から考えると、実は《アメリカ使節団の報告書》というのは村井さんがそれから何年もたって、改めてきちっと編集し直しているんですね。つまり誤解されてるということで、それをものすごく大事に考えておられて。それを最近ですけども、改めて村井さんが編集し直して翻訳もキチッと見直したやつが講談社から出てるんです。だからぼくは、偶然ですけども非常に正解だったんですね。他の本を読んでないというのが彼は非常に良かったようです。で、それならいいだろうといわれて、何の事かわからないんで、「これは何の授業なんですか?」と聞いたら、「ああ、これはソクラテスの授業だ」と。つまり、教育史っていうんですけども、村井さんとしては、ソクラテスについての授業であるということだったんです。だから、俺はソクラテスについてやろうと思っている、と。で、それについては今後本があるから、と。で、その次の授業にでたら今度は何をいうかと思ったら、ソクラテスは毒をあおっていると。で、なんでそんなことをしたんだろう。ソクラテスは何故毒をあおったと思うかね。それをね、君どう思う?こんな事ですからね、これもまた分からないんです。絶望したんじゃないですか、とかなんとか。そうかねえ。なんて、いやーとかなんとか。それもその問いも実は、大変な問いだったんですね。それはそれから何年間もたって、やっぱりソクラテスが何故死んだかということやはり非常に大きな仕事があるんです、村井さん自身の。

村井ゼミと教育  
工学問題

ま、そういう事も色々ありまして、しばらくでてたんですが、毎回授業が終わるたびに村井さんのところに行きまして、今日僕はこんな風な事を考えた、

というようなことを話して、そして沢田允茂氏のサイバネティクスの論文をもらったんだけど、どうも腑に落ちないのがこういう事なんだ、ということで、色々話してたんですね。そうしたら、うん、ちょうど俺もそこところが気になってたんだという風な事を話しておられて、それで今度から君は僕の大学院の授業にでなさい、とこういうわけです。それで、もう学部の三年生だったんですけども、それがなんとですね、大学院の授業ってのは月曜日の朝の10時頃始まるんですが、出てる学生っていうのが、みんなこういうおじさんおばさんとかばかり、学生がいない。(笑)とにかく全然学生がいない。つまりね、いろんな大学の、要するに、村井さんのもとを育った人達ですね。玉川大学の教授だとか、慶応卒の、もうおやめになった校長さんとか、その頃はまだ一数学の先生だとかね、ま、いろんな学校の先生だとかいろんな大学の先生だとか、そういう人達が集まって、それで、何をやるかっていうと、スキナーの「Teaching Machine and Program Learning」、プログラム学習についての問題だとか、それから、ムーアの「Principia Ethica」(倫理学原理)、そういうものを読むんですね、始めは組合せが全然わかんなかったですけどもね。始めわかんなかったんですが、朝、10時頃からやりまして、お昼ごろになると、誰かが牛乳とパンを買ってくるとそれを食べながら話をして、だいたい3時頃までそれをやって、それからあとどこかへ行くわけです。それで一緒に飲んだり改めて飯を喰い直したりなんかして、それで、たいがい夜までつき合っているという、そんなゼミだったんですね。で、そんなところに、とにかくなんで僕が入れられたかという、丁度、後から教育工学という名がつく問題があって、つまり村井さんはアメリカのハーバード大学で、スキナーと出会う、教育を工学的にやるということについてのひとつのイデオロギーを聞いてきたわけです。だけどそれがいったいどういう意味を持っているのかどうも分からない。だから教育ということと工学ということとが、どういう形でインタラクションを今後もって行くべきかということは全く新しい教育哲学の問題だということですね、そこで、自分はその時にソクラテスについての講演をさせられた、と。そこで、つまり、ソクラテスというのは、ま、対話ですね、対話術というのが工学でいうところのコンピュータなり機械なりとの対話っていうこととどう関係するんだろうかということをお問われて、自分なりにソクラテス法と呼ばれている、その当時のティーチングマシンの人達が、ソクラテス法と称した一つのをやっていたんですよ。で、それはいかにインテキかというのを彼らに喋ってきたって訳ですね。それは全然対話じゃないと。ソクラテスのいう対話ってのはそういうことじゃないんだ、ということだけ話してきた、と。じゃあ、なんなんだっていわれると、それは、今後工学とは全然無縁でいくのかっていうとそうでもないようだから、それについて考えようというところでそういう話があったんですね。ですからそこでけっきょく彼らは僕が丁度工学からきた人間だからというもんだから、そこらへんで工学の論理と教育の

論理、しかも人間っていうものの本来の有り方っていうものはどういう関係があるんだろうかっていうことについて、一緒に討論しようということに入ったわけです。

プログラム学習  
ブームにのって

なんたらかんたら言っている内にしかし教育工学とかティーチングマシンとかプログラム学習というのはブームになっちゃったんですね。そこでぼくはなぜかそういうことの実験が早かったもんだから、早いっていうか、そりゃ、もともと工学ですからね、できちゃうわけですよ。で、そうすると、それこそ日本全国のいろんな日本学習オートメーション研究会だとか、なんとかなんとか連盟だとかっていう所へ呼ばれて、小遣い稼ぎが出来てしまうということ。北は北海道、南は九州にまで、鞆持ちじゃなくて、それこそ鞆もたせる立場。しかも、身分を明かさずに、講師と称して稼ぎまくっているということがあった。それがまあ、大学の3年生ですからね。恐ろしい話ですよ。(笑)それがそんな驚くべき事なんですけれども、そしてそのティーチングマシンのプログラム学習の原理とはかくかくしかじかであり、工学の論理はこうであり、これからは統計的な研究ってのはやらなくちゃならないんだとか、学習っていうものは実証主義で教えなければいけないんだとかって、いけばパラパラ出てきちゃう。できちゃうから、なんとなく喋ってしまう。(笑)そういうことで、なんか変だなあって思っているんだけど、村井さんのゼミの中にも、プログラム学習というのをこれからはやっぱり教育を変える中心におかなければならないって人も入っている。沼野道夫氏なんかもそうですかね。これはもう村井さんのもう第一等の弟子ですよ。そういう人もいれば、村井さんって、自分の弟子は自分と同じにしないって非常に強い意識を持ってて、だから彼の弟子で、ソクラテス研究をしている人は一人もいないですよ。まず絶対に同じ種類の人間を出さないという、そういう意識があるわけで、だからそういう意味もあって、中では年がら年中、喧嘩寸前の討論ばかりですよ。僕もだから負けてられないってとこです。沼野さんとは毎日、毎日というか週に2回、月曜日はそうやって授業で、それからあと、水曜日とか金曜日とかは一日沼野氏らは研究会で集まる。僕も行くってことで、一日沼野氏なんかと研究会で、それも喧々ごうごうとやってね。で、そういう事ばかりやってたもんで、まあ喧嘩しながらも、そういうプログラム学習だ、ティーチングマシンだってことを世の中に普及する段になると、お呼びがかかるもんだから、沼野さんと一緒に講師団と称して行くわけです。それでなんだかんだってなことをやってたわけです。で、だんだん変だなと思っていたんですけども、たまたまそれで一年間の修行が終わって、卒論を書くということになったんです。それで4年生になり、で、4年生の卒論というのはその「教育における工学的研究」と称してですね、それでその工学の論理ですね、要するに、測定したり、それから学習行動のフィルム分析というのをやるわけです。これは、要するに、オートメーション工場での人間の動作をフィルム分析するんですよ。その頃、ちょ



うど今でいうビデオです、その頃は8ミリとか16ミリで撮って、そして、符号化するわけです。持つ、動かす、なんとかする。それを人間の学習行動についてプログラム学習しているときに、考えている、書いている、迷っている、消している、先を見ている、なんとかしている、それを全部符号化して、そのプロセスをこうグラフで表してですね、どこで行きづまっているかを見つけて、で、それを、行きづまっている所をですね、その原因を、教材と照らし合わせてこう何とかするという方法を私あみだしましてですね、“何とか法”と名付けてまして、それを売り込んだわけですよ。それで、エルモ社で出したデモーションフィルムっていうか、それは、工場で分析するための機械なんです、それを教育現場に持ち込んで、今でいうビデオですな、昔は8ミリもそういうエルモのを使って、それを一秒一コマに、コマ落しで撮るわけです。工場では一秒一コマで撮るような、技術があったんです。それをだから教室の授業の分析に使い、一秒一コマで撮りますと、符号化しやすいわけですね。それで分析をする。ま、そんな方法で学部の卒論いっちょあがったわけです。

再出発

それでその後僕は、教育の方の大学院へ行こうと思ったんですね。で、村井さんにまた相談したんです。僕は教育の大学院行った方がいいか、と聞いたら、また、二番目の(笑)これをくらったわけです。やめとけ、俺は引き受けたくない。何故かっていうと、我々教育学者っていうのは、工学だとか、技術だとかって聞くと、何にも分からずにそういうものが駄目だとか、それは救いがなにかいって、ただ人間は違うとしかいっとらん、と。だけども、君みたいに、とにかく工学の事をちゃんとやりながら考える人間というのは滅多にいないんだ、と。それは君がやるしかないんだ、と。それを、自分が工学がやだだからやめたなんて来られたんじゃ、それは全然意味が違うから駄目だ、と。お前工学ちゃんとやってこい、と。それだったら、とても僕は君には希望は持てないと言われたんですよ。最初はだから、霜山徳爾氏にこれをくらい、二番目に村井実にこれをくらったわけです。それでクソっということで、私は、やっぱ工学でちゃんとやらなきゃだめだということで今度は、管理工学科の修士課程に入ったら、普通は30単位で済むところを僕は50単位くらいとって猛烈にやったわけです。それで修士論文がですね、コンピュータで学習過程の設計をするという、そのプランニングを出すと、そういうので、修士論文書いたんですけどね。で、それはもちろん一所懸命やりまして、それで、工学部の修士論文の中の最優秀賞を取りまして、自分は一応工学としてはやったぞと、村井さん、僕はやりましたよ、一応工学のことはやりました。で、さあ、というふうになった頃、日本における教育界がこんなになっちゃったんですよ。プログラム学習ブームですね。

竹内

何年頃？

佐伯

'64、5年ですね。それで、僕は修士課程の学生になりながらもそれこそ研究会の指導者とか何とかってことで、日本全国に呼ばれては、そういう事はもっと実証的に研究しなければいけない。“つもり”と“はず”で教育をやっておるから日本はよくないんだ、なんてね、そういうことを言まくってとにかく稼いでいたんですよ。それで、統計の基礎みたいな事を教えてみたり、何かかんだでやってられたんですね。けど何か自分の脳味噌にたまってるね、何かどっか全然違うところのものね、何か使って生きているような、非常に不気味な、自分はこれは変だ、このまま行けばとにかく食っては行けると。何となく食っては行けるけれども、どうも違うところに自分の関心があるにも係わらず、そういうところで食っている。けどその関心があるところ、どこへ行ったら育てられるか全然わかんなかったんですよ。だから、もう僕は佐伯のさの字も知らない世界に行きたい。こう思ったんですね。つまりなんていうのかなあ、ある意味じゃあ、妙に白けちゃったんですよ。僕は、雑誌、その、1965、6年の、学習心理学なんて、小学館から出た雑誌を見ますと私の名前なんて出てたりして、そのころ教育工学系の雑誌には結構僕の名前を出してたんですね。だから僕をだれも知らないところへいかなきゃいけない。で、アメリカへ行って、とにかくまるっきり、それこそ脳味噌全部を空っぽの状態、一からやり直そう、と。そういうところでアメリカの心理学に入ったんですけどね。で、ま、そんなことがありまして、そこで、実際スキナーに対する批判だとか何だとかってというのは根底からはっきりとわかってきたということもあるわけですが。そういう事を通して僕なりに人間というものについて本当に考えるチャンスっていうのを求めていると、違う話が入ってくる。何かこれかなあと思うと違う話が入って来る。でもそう思いながらそれにある程度なんとなくのりながらも、でも本当は違うんじゃないかなあってなことをね、ずっとやってきている人間なんですよ、僕は。だからいつでも僕は不適應なんですよ。で、常に不適應でありながら、えー、（笑い）どこへいっても不適應なんだと、自分はね。でも、それがいいというか、それでいいんだなあという感じですね、ずっとやってきているんですよ。



(1)擬人化による  
理科教育

## 2. 問題のはじまり・・・「物になって考える」

それで、グーンと飛んでしまいますが、今日お話しするようなこの問題について僕が何か思いついたのは1975、6年ですかね。非常に偶然的なことなんですけれども、理科の教育だか、理科教室だか、何だとかっていう理科系の雑誌に原稿を依頼されたんですね。で、そのときに、何を書いたらいいかなあってずっと考えたときに僕は、物理学、物の物理的なものを理解するときに、なにが“物になってみる”、というようなことが非常に重要な科学者の秘訣ではな

いかな、と。たとえば、アインシュタインが光になってみるとかですね、何かになってみながら考えることが理科の教育として僕は、おろそかにされていたんじゃないかなあという風な気がしたんですよ。で、そのことを書こうと思ってたんですね。だけど自信がなかったんですね。そんなこと言っているのかなってわかんなかったんで、たまたまそれがやっぱり村井さんと酒か何かの時にですね、僕はちょっとつまんないことを考えていて、理科の教室とかなんとか雑誌で、原稿頼まれたんで、擬人化ってことでもって物理を理解するっていう風な発想は大事なんじゃないかと思うんだけどもって言ったらね、そしたら村井さんが、それは君大変なことだ、まったくその通りだ、と。で、やっぱり、擬人的に物を見るっていうか、物になってみて考えるなんてことがだめだなんてことをね、科学がそういうこと排除したのは大変な間違いだった、というふうなことを言ってね、それはすごくいいことだ、と。是非ひとつ書け、というふうに言われたんですよ。で、それで、僕、妙に元気を出して、それで書いたのがね、'75、6年かに出した小さな雑誌にあるんですけどね、それから、僕かなりそのことを真剣に考えたんです。物になって考えるっていうね。そして、そういう、物になって物を考えるっていうことが、単に、物理を理解するとかなんとかだけじゃなくて、実は物を考えるときには非常に基本的なところにそういう物になって考えるっていうことがあるんじゃないかなということ、一つ徹底して考えてみたいなという気がしてきたんですね。それで、78年に、『イメージ化による知識の学習』というまあ、題名は全然本文とは違う題名なんですけれども、実はその擬人的に物事を見ていく、その物になって考えていく、物になっていくときに、なるってどういうことなんだろうっていうことについて考えたものを書いたんですね。物になってみるっていったときに、なる自分、なってみた自分とこの自分とはどういう関係があるんだろうなんてね、そういう事が非常におもしろいっていうか、だから僕は自分の分身だ、と。自分ではないんだけど自分なんだ、と。こういう関係で物になるだなんてね。そういうことで、自分でないものに自分になる。自分でないんだけど、しかし、それは自分なんだというその妙な感じを持ちつつ、物になっていくという、そういう自分の分身をいろんな風に変身させてみる。そういうような関係っていうのをですね、えー、だから、なんて言うのかなあ、ただ単に物になるっていうんじゃないって、やっぱりそういう多視点的にっていうのか、様々な違う自分っていうものをそこで試しながら、なっていくというような事が大事なんじゃないのかなあ、なんてことをずっと思い始めたんですよ。で、それが、78年に出了ました『イメージ化による知識と学習』という本なんですけれども、そんなことをですね、ずっと考えてたんですけども、ただですね、あまりにもそれは非科学的なんですよ。およそぜんぜん科学にならないし、なんともいえない奇妙きつなものです。で、それはその後、認知心理学とか認知科学とかっていう話で、記憶がなんだっていうような話があったときも、そういう

(2)マイケル・コール  
の比較認知学

なってみるとか物になってみるなんてなことは全然、その、あれなんです。

じゃあ、その話しが、そうやって今にいたるまで維持されてきた、もう一つのやっぱり支えてくれた人が出現しておったわけです。それが1980年に、日本心理学会が招待した、マイケル・コールという比較認知研究所の所長さんなんです。で、コールさんというのは、実は、異文化へ行って、異文化の人の認識、特にアフリカの人たちの認識を研究しつつ人間の認識について考える人だったんですね。ただ、まあ、発達心理学についての非常に重要な、ちょっと後で出てきますけれども、人間の認知が領域に固有的であるという言い方、つまり、その活動のドメインに非常に結びついた認識なんだということで、ピアジェの考えているような、認識というのは不変的な一般的な構造が出来ていくってことに対しては、どうもそうじゃない、認識っていうのはもともとが領域に固有な認識なんだという。活動領域に認識は固有なんだという。で、何故マイケル・コールがそういう事を考えたかという、アフリカのいろんな部族へ入って、特に彼はバイ族というところへ入ったんですが、そのところで、ピアジェの課題をやると大人でもなんでも、みんな我々の基準でいうと4、5才の知能しかないというわけです。で、その課題のもちろん意味が分からないんだということがないように、意味は彼らの例題を出して、彼らの生活上の題材を使うわけです。彼らがしょっちゅう使っている題材を使うんですが、それにもかかわらず、どう測定しても、西洋文化でいうところの4、5才の知能しかない。ところが、彼らの生活を見てもものすごくちゃんとやっている。もう裁判ではちゃんと公平に、土地争いは解消するし、どこそこに航海に行くの、やれ、稲をどうこうするの、もう非常に高度なことやっているにもかかわらず。それでその課題がどうも変だっていうので、色々研究してみると、やっぱり認識そのものが、活動領域に依存しているっていうか、彼らがやろうとしてる活動の文化の営みと非常に結び付いているっていうか、やっぱり、それの方がむしろ中心じゃないかという風な事がでてきて、ある意味じゃあ、その認識の領域固有性みたいなことをですね、言い始めてた人なんです。それで、日本の心理学会が、マイケル・コールを呼んで、講演してたわけです。その時、北大だったんですけども、戸田正直さんという、（これは認知科学関係で昔から、非常に、何故か親しいです。その親しい理由はまた色々あるんですけども、）その戸田正直さんが、僕に、講演をやれという。そのとんでもないことを思い付いたんですね。それで、本当に若造と言うか、東京理科大学経営工学科の先生ですよ、私は。日本っていうのは不思議なところですね、就職するときは、アメリカで心理学やったからといって、日本で心理学で受け入れてくれるかという、そういう訳ではないんです。日本の心理学科と言うのはね、自分の弟子を教える職につかせるんですね。で、私はどの先生の弟子でもないんですよ、日本では。だから、私はアメリカの心理学ではPh.Dをとり、ジャーナルをMathematical Psychology誌に、（日本人では最初でしょうね、もしかした

ら、最後かも知れませんが、) そういうところに、ま、非常に難しい権威のあるところに出しているということで、経歴としては、まあ、私はProud of myself だったんですけども、日本の心理学関係ではなんの関係もない。で、それで、私を受け取ってくれたのは、私は慶応大学の管理工学科をでているというその業績で、経営工学科という所に就職できたんです。だから、私は経営工学を教えていたんですよ。で、そういうところへ、北大で、私に講演をやれという話があった。で、その時僕はなんかわかんないけれども、擬人的な認識ということに非常に興味があったんで、その時に、たまたま、物になってみて物を認識するという小さな実験をやったんですね。mental rotation っていう心理学で有名なあのブロックが回転するのをね。それが裏の図形なのか、表の図形なのかを判断する時間が回転角度に依存するっていうデータがあったのは私はその物になった気持ちになれば、一瞬で全部どんな角度だって関係ないっていうデータを出したんですね。それで、物になるということが、実際のパーセプションに大いに影響するという話を中心にして、講演をやったわけです。そしたらですね、その講演の噂をマイケル・コールが聞いたわけです。噂を聞いて、つまり、同時にやってるわけですからね、聞くわけじゃないですよ。そして、マイケル・コールが僕に、それは非常に面白いことだといまして、そしてそれは、全く、我々の西洋的な発想の虚をつくっていうかな、だけじゃなくて、自分は前々からいろんな文化の中でそういう、物になって物を知覚するということがあるように思っていたから、それをやったっていうのは大変おもしろい話だ。で、それから、マイケル・コールと僕とはものすごく親しくなりました。ことあるごとにその擬人的な、その物になって物を理解するってことをね、ちゃんと理論にしろ、本にかけ、なんてなことを会うたびに言われたり、招待するといわれて、半年行ってみたり、いろんなことをやりながらですね、それをお前理論化しろと盛んにいわれているんですけどもね。出来ませんねえ、これは、なかなか出来ない。それで、悪戦苦闘しているっていうのが現状で。

(3)理論化の難しさ

そうこうしてる内に、こういう竹内さんとか、遠山さんとか、もうしょっちゅう気楽にみんな物になりながら考えているっていうようなね、(笑) そういう人達と出会ってる内に、僕も、なんだか、異文化っていうのかな、何が何だか分からないというか、混沌とした状態。ある意味では「物になる」っていうのは、日本では割と楽なんですよ。割と楽であるだけにそれを厳密に捉えるっていうことがむしろへたなんですよ。で、それに対して向こうの人は、やっぱり物になって考えるっていうのは、何か感じはわかると。で、そういう世界があるようにも思うんだけど、それはいったいどういう事なのかっていうことをつめようとすると、あまりにもボウボウ漠々としている、というところで。「物になる」っていうことがどういう意味を持っているのかっていうのは、アメリカや西欧文化の人達にとっても、きちっと理解したい。で、まあ、僕の

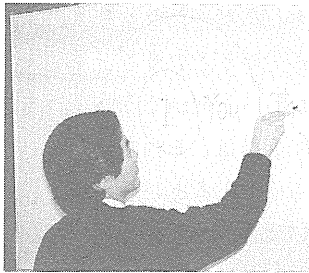
方では、そういうことを1975、6年から7、8年辺りに思い付いた事をずっとそのままほったらかしにして、実践だとか、実験的な研究だとかをちょこちょこっとやっていた。でもあるんですよ。そのことが最近になって秦野キヨオさんなんか、幼児が植物や動物を理解するときに、自分が、お花になったつもりで考えると、お花に水が必要だとか、やれ何が必要だとか分かるということを、きちっと実験的につめた実験をしているんですね。で、やっと何かそういう事が心理学の実験にのるようにはなりかかってはいる。でも僕は、それを見ても、まだ何かやっぱり学校文化の中で、植物はこういうものであるという知識を想定した上でね、で、それが例えば今みたいなプロセスで理解できるんじゃないかといってる様な気がして。でも、もっと違うんじゃないかなあっていうか、本当に、お花になるっていうことはそういうことじゃないんじゃないか、という気がしてですね、その辺が僕なりにどうしていいかということで、またこう、悩んだり、わかんなかったり、という風なことがあったわけです。

#### (4)新たなパース ペクティブー 愛育養護学校の 実践

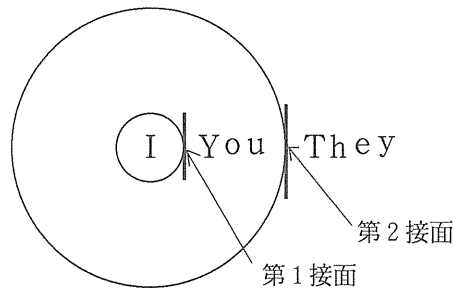
それで、まあ3番目だか4番目だかのビッグイベントっていうのが、じつは、竹内先生もご存じの、愛育養護学校というところにおいて、実践を見ることが出来た訳ですね。で、その愛育養護学校の実践を見たときに、見て、それについてしばらくずっと色々考えているときに僕は、そういう物になるっていう意味での実践ということの持つ、あるパースペクティブが見えて来たっていうのかな、つまりそれを中心に置くっていうことが、従来の認知、人間の認知だとか思考だとか、学習だとかについて考えてきたことと、どこでは接点があり、どこではその接点が切れるのかという問題ですね。それともう一つ、これはむしろ竹内さんのほうがうんと早いと思うんですが、他者理解ということですね。他人というか、人っていうもの、(こちらは人間関係ですからね、まさにそれが中心になるわけですからね、)人っていうものを理解するっていうか、人と関係をうまく作るということ。それと物になるということとは、どっかでつながっているようでいて、どこでつながっているのかがよくわかんなかった。で、色々わかんなかったのがその愛育の実践を見ているときにそのつながりが見えたということですね。つまり、「人との関係をつくる」と「物になる」ということがですね、基本的なところで非常に中心的に一つつながっていることかな、ということが非常に僕にははっきり分かったっていうところがあるわけです。で、それと、僕がこういう物になるとか、あるいは人との関係をつくるかっていうことが結び付くというこのパラダイムを図(次頁図)で書くとね、こういうことです。これをちょっと念頭に置いておいていただくと後の僕の話が非常にすっきりすると思うんですよ。

### 3. I-YOU-THEYと、二つの接面





【図】



人間は2つの界面をもっている。

第一界面：私（I）とコンピュータ（You）との関係

第二界面：コンピュータと外の世界（They）との関係

人間っていうのは二つの界面を持っているということですね。最初の界面というのは、「私とYOU」的な関係、あなたと呼べる人との関係が第1界面で、それからTHEY的世界と、そのTHEYとの間の関係っていうものがある。で、それを人間ってのは、たえず二重の界面をいつも抱えながら生きているというね。で、この図はどこからきているかという、実は、皆さんが聞くとちょっとあまりにも以外に思われて困るんですけど、私がコンピュータの事を考えているときに出てきたんです。つまり、コンピュータを人間にとって非常に使いやすくしなきゃいけないという研究があるんです。その研究をコンピュータのインターフェイスの研究というんですね。で、たとえばコンピュータが、ワープロでもそうですが、皆さん非常にわかりにくいとか、使いにくいとかありますでしょ。こういうこと、よく議論されているとき、僕は、2種類の界面問題があると。一つは人間が学習しにくいとかコンピュータが何ができるのかということが私に伝わらない。私とコンピュータとの関係がうまく行かないっていう界面。それを第1界面と言ったわけです。第2界面は、そのワープロなりコンピュータなりが、いったい外の社会にどういう関係を持つのかっていうことがわからない。例えば、紙が無駄になるとかですね、やれ、どういう公害をもたらすようなリボン、例えば、ワープロのリボンだとか、あれはすごい高いんですよ実はね、だとか、特別な要素ですね、あれ再生できないとかですね。そういう問題だとか、あるいは、もっとつながりを言えば、原子力発電所の場合だと、制御盤でのコントロールのしやすさと、制御盤がつながっている外界、まさに環境世界との関係。ま、我々どんなものでも二つの界面があるんですよ。つまりそんなものであったってそれが世の中にとってどういう意味を持っているのかってことに私自身がそこに責任を持ちながら、今、インタラクショニングしているはずなんです。ところが、与えられた物とどうやってインタラクトするかしか考えていないというのは、はなはだよろしくないということですね。だから、例えば、マイクロフォンひとつとって、私とマイクロフォン

との接面問題、私が持ちやすいとか、使いやすいとかなんとかってことがあるだけじゃなくって、それが、録音なり何なりってときに、どういうことになるのか。それ自身がどういう風に使われていくのかという、その先々ですね。で、そこを第2接面と呼んで、その両方の接面のインタフェイスを我々は常に考えなきゃいけない。ま、これが僕の、コンピュータのあり方について考えるときの原点なんです。で、それと、人間について考えるときの原点とがあるときになんとなく重なって見えてきたんです。つまり何か人間ってというのは、THEYっていうのを意識すべきなんだけども意識し過ぎることからくる問題がある。で、だからといって、YOUっていうものが非常に重要でありながらそこら辺の問題もですね。で、そのYOUとTHEYとIとの関係っていうものがですね、僕はなんか非常にこのコンピュータの場合とおなじで、うまくいってないケースが多いような気がしたわけですね。つまりある場合は非常にべったりとYOUと結びつこうとする。なんかこう、非常に、ユーザーフレンドリネスと称しまして、いろんなものが迎合するかのごとくに非常に使いやすそうに見える。けどもいつのまにか、そこで作られる世界というのは閉じちゃっている。全然ある範囲を超えられないということがわからなくなっていくユーザーフレンドリネス。例えばこの頃、明日か明後日かテレビでですすけれども、私、この前の日曜日、ニュース21から取材にきまして、バーチャル・リアリティ、仮想現実感というのがこの頃コンピュータで盛んになっているんですよ。つまり、自分がコンピュータの中に入ったみたいになって、こうやって動くんですね、コンピュータの画像の中で映像が動いちゃうんですね。で、そういうのをどう思うかなんてなことを聞かれているときに、やっぱり念頭にあったのはこの話です。つまり私っていうものが、その世界の中で非常になじんでしまうということについて、第1接面的には非常にうまくいく。ところが、それ自身がいったいなんなのか、それ自身はどこと結びつくかってことが見えなくなるっていう、そういう問題があるわけですね。ま、そういうようなことがいろいろありまして、そういう風なことを考えるとき本当に、あなたの存在ってなんなんだろう。つまりこことここで、後ろにTHEY的な世界を背負いながら、しかしIに対して、ある意味でその人にとっても道具になる。道具になるんだけど、身体の一部になりきってしまうわけでもなく、それが見知らぬTHEYに対するある活動を誘発していくようなそのYOUのあり方っていうもの。これの問題と、それから人間にとってあなたという存在ってというのはどういった役割を果たすべきかということとがですね。こうなんか僕は道具のあり方とあなたという存在のあり方っていうのがですね、何かしら非常に関係してくるわけですね。で、特に幼児を見ても、チンパンジーを見ても、道具っていうものを使おうとする前に、非常に親しくプレイフルに道具としたしむんですね。それは、ケラーのチンパンジーだってそうなんです、バナナを見て棒でポンとたたくなっているのは、そんなにすぐ、棒を置いときゃやるってもんじゃなくって、ま

ず棒で遊ぶということがものすごく長い期間あるわけですね。それで、いろんなものについて、地面をただボンボンつついてみたり、穴をあけてその上に棒を突き立ててそこへスルスル登ってボンと飛び降りたり、あるいは、どこかをパチンパチンたたいてみたり、あるいは、雌のチンパンジーの方へそうやってちょっといたずらしてみたり、まったく棒でもって徹底的に遊ぶっていうことがある。で、それをやったことがあったときに、はじめてバナナを採ろうとして何回も飛びついて駄目なときに棒がそばにあると、パッと取ってそれでたたくということが起こるわけであって、それがなくてですね、棒がいきなりあってもそこに結びついていくわけじゃない。で、そういう風なことで、私は道具のあり方っていうことと、人間と人間との関係でYOU的というの、つまり、自分にとって周りに、ある意味では、非常に馴染むにも係わらず、それがあつた世界に広がる媒体となっていくような、そういうYOUのあり方というものとの関係ってのが、なんか僕には重なって見えてきた。そういう背景があるわけなんです。で、それとさっき言った、物になるということと、それからあなたという存在と出会うということ、それとがどういう風に結びつくのか、どういう風にしてそれが関係を持つのかというのが、私としては、ある意味じゃ、私のそれこそ成りゆき上、なんとしてでも悩んでいたことだということなんです。

#### 4. 「内側からみる」こととYOUの存在

〔以下は参考として配られた佐伯氏の論文「内側からみる」を参照しながらの話〕

それで、今回、基本的には愛育養護学校の実践というのが僕にとっては、それを解決させてくれた重要なきっかけだったんですけども、それを、さらりといってしまうのもなかなか難しいもので、まず「内側にはいる」、つまり「物になる」という認識について私なりにある程度たどり、それがYOU的存在というものとどういう風に関係してくるのか、ここでいう“あなた”というものの存在とどういうふうにつながってくるのかっていうことを、考えてみたい。

##### (1)湯呑みを見る

で、それを、一応最初僕は《湯呑みを見る》という話で、湯呑みを見るときに、「内側からみる」っていうことができる。で、「外側から見る」っていうことは、ごく普通にいうところの、様子がなんだろうか、ですね。あれがどうたらこうたらというふうな見え方、これが結局、傷がついてるとかやれなんだってな話なんですけど、それに対して「内側からみる」っていうのは、やっぱりさっきいった、そのものじしんに自分自身を、(僕は「浸り込む」なんて言い方をしましたけど。なんかそこにスポッと入ると、ちょうどその中に自分自身をちょうどそのサイズに合わせて自分自身がその中にひたるっていうね、なんかそんな感覚の言葉がないので、スポリと浸り込んでという言い方したんですけど。)ちょうどそのもののサイズなり、形なりに自分自身をスポッと入れてしまう。で、その入れてしまった瞬間に存在というものの自身が、なんていうのかな、

“ある”っていうことのありがたさ、（というとなんか変だけれども）、“ある”っていうのはすごいことだなあっていう風に、なんか感じられてくる。つまり存在しているということ自身が、なんか、すごく、もうそのことだけでなんかこう嬉しくなるといって変ですけどもね、存在している、ここに花が存在している、ここにコップが存在しているっていうそのことの方が、どうであるとか、こうであるとか言われていることよりも、もっともっと大事なことのように感じられてくる。そういう、“ある”という事実に対する自分自身が、非常に重大なものに感じられてくる。そうすると自然に、いったいどこからきたんだろう、どうやって無から自分が生み出されたんだろうという、そういう発生の原点っていうのに、自分なりに思いをはせることが生ずるんじゃないか。で、それで、例えば、これはもう人によって色々違うでしょうけれども、ろくろで出来てくるころから考えるかもしれない。あるいは粘土層から考えるかもしれない。それは人によって色々違うだろうしね、それは、なんていうか、いろんな微妙なその温度の加減という中で、湯呑というものが出来上がる、炉での焼かれ方っていうことに思いをはせるかもしれない。ただどんな人でも僕は、なんらかの形でそのオリジンというやつにね、思いを馳せざるをえなくなるという気がするんですね。それはやっぱり自分が存在してる、そこに存在してるっていうこと自身に対して、やっぱりなんかこうすごい感動があるっていうか、存在していること自身に対する感動があって、その原因型っていうのかな、その基っていうものをやっぱり自分の中でもう一度再現したくなるっていう、そういうことがそこで起こってくる。で、それをまたさらに存在しつづけることっていうのに非常に重大な問題、っていうかそれは大事なことなんだ、どこまでいっても一度存在がそこで発生したならば、それはずっと続くというね。だからどうしても時間というものをそこで凝縮させて、感じるようになってくると。で、そういう、自分自身というものをその物の中に浸らせるっていうか、浸り込ませるっていうことは、やはりある意味じゃあ、まずその存在に対する肯定的な捉え方ですね、存在しているということ自身が、それでいいということなんだという、さらに、それ自身が始まったんだ、ある時始まり、そしてそれはずっと続くんだという、そういう時間経過というようなものをそこで感じるようになっていく。

で、そういう時の、私自身が中で自分の存在を感じるっていう時に、今度は外からの見られ方ってのがやっぱり気になってくる。で、それが、ある場合にはやっぱり、すごく嫌なもの。なんか自分が存在しているという重要さを共感してくれない、その捉え方のような感じがして、非常に愉快じゃないんだけど、でも、それをもう少し丁寧に、場合によっては時間のかかることだしね、その外からの見えっていうものと、出会うっていうことは簡単なことではないんだけど、やっぱり、外にいるもうひとつの存在というものと自分の内側からの存在とが、やっぱりそこで両方ちゃんと受け入れることが出来るように

なってくる、ということになれば、ひとつの対話ということがそこで始まるだろう。で、それは、自分が存在してればいいんだと思ったときには気づかなかったこと、つまり、それは、外からの見えなんだけど、例えば、自分には傷がついているとかですね、あるいは、自分にはこういうところにひびが入っているとかなんかという風なことを、一旦外側からみたときに指摘されるようなこと。で、それを自分は改めて受け入れてみるというですね——それは、受け入れるってでもですね、それを、評価として受け入れるっていうわけじゃなくて、あつためなんだとかいいんだっていうこととして受け入れるんじゃないで——、私という存在のユニークさっていうのかな、己というものの持つひとつの歴史、それからユニークさ、唯一性ということとしてそれを受け入れていく。しかしそれを指摘されるっていうか、そういう事に目がむくっていうのは、一旦外側からの目になってみる、ある意味じゃあもう一回出直すっていうか、ということをやっぱりそこで経由し、そしてそこからもう一度内側の目にはいるというようなそういう関係が起こってくる。で、そこで僕が何を意識しているかっていうと、最初の段階では、IとYOUっていうその湯呑をYOUとしてなんとかそれをIの世界の中に取り込もうという形が起こる。で、それに対して、THEYとしてのその湯呑、湯呑というものの捉え方というものを、つまり第2接面的な意味でのインタラクションをもう一度そこで意識することによって、実はIというものの自己（湯呑としての自己ですが）、その持つひとつのユニークな唯一性というのかな、そういうもののアイデンティティっていうものをもう一度つくり直す。そういう関係として考えている訳なんです。ですから、それは評価のようでいながら、それを自分の存在を否定するか、受け入れてくれるかという意味での評価ではなくて、あるひとつの見えというものを、外側から、THEY的な見えっていうものを、自分に対する存在の否定として受け止めるのではなくて、自分に気が付かなかった自分の自分らしさっていうことをもう一度そこで捉え直すというきっかけとして、そのTHEYというものからの見えっていうことによってもう一度そこで出直すということが起こるだろうと。ま、こんな様なことを、一つ私なりに考えていた。それは、ですから、YOU的な形で捉えられるものがある意味で、自分とただ混じるという意味でのインタラクションではなくって、自分の見知らぬ他の世界とインターアクションすることによって自分自身をもう一度つくり直すようなきっかけにしていく、という、それが僕なりに、重要なYOUになっていく対象というものの持つ役割で、それにはやっぱり二つの接面を持っている。私が湯呑になったときに湯呑の内側と湯呑というもの、湯呑になろうというときの湯呑になるということ、湯呑っていうものを外がどう捉えているかっていうこととをですね、そのなった自分としてそれを捉え直すっていう、そういう働きとがそこで加わっているっていうか、インタラクションを起こしている。ま、こんな風に考えるわけですね。

## (2)子どもを見る

で、それを今度《子供を見る》っていう風に考えてみるということなんですが、その時に、私なりには、子供を内側からみるということは、非常に重要なことなんですが、むしろその前に、子供をいわゆる外側からみているときの、見ている人っていうのはなんなのかということについて、ここではですから私がいいたかったのは、このTHEY的な存在ってなんなのか、ここでいうその第2接面の外側ですね。THEY的存在ってなんのかってことを明確にしたかったわけですね。というよりも、三人称的世界と二人称的世界というものの方が非常にまずはっきりと違っているということを明確にすることと、それからそれにもかかわらず関係をもつてということとのその両方を言いたかったわけです。一つ、我々が、いわゆる子供について、ああだこうだ、性格がどうだ知能がどうだとか、やれなんだって言うときのその私達っていうのはなんなのかっていうと、これはぜんぜん私っていうものがない世界、つまり、だれがっていうことが言えない。つまり、もうそういう風になって一般大衆、普通の人とかよその人っていうふうになっている。つまり、それは、そういう評価の基準というもの自身が、無名的である。アノニマスというのかな、無名的。で、さらに、その対象となっている私というものに対する評価、あるいは子供っていうものに対する評価、それも、無名的なものとして評価します。つまり、One of Themとして、どっちなんだという風な形でなるっていう、そういう世界であって、これは、見る方見られる方の両方が三人称化してるっていうね、そういう三人称化した世界というものがそこところで非常に作られるんだということ。それが、実は「外側からみる」ということの最大の特徴だっていうんですね。

ま、ついでにいきますと、例えば、この頃コンピュータで、デスクトップパブリッシングというのがありましてですね、いわゆる、コンピュータで本当に印刷物と同じ様なものができちゃうんですね。もう、レイアウトだなんだってな。それがすごくはやるわけですよ。で、いったいそれなんのため、誰のため、っていうとだれも答えられない。なんかすてきじゃないっていう、すごいじゃないっていうことで売られるわけです。文字のギザギザが消えたとかね。じゃ、それなんのため？ 誰にとっていいの？ といって、全然対象がいらないですよ。対象がいなくてもすてきだという様なものが、なんかすごくいいこととして語られる。つまり、誰のために、なににそれを使うのっていうことが、なんにもないけれども素晴らしいことになって、複雑なことになっている。精巧なことになっているっていうものが、すごく世の中にあるんですね。これも僕は三人称化しているという。それから、ハイビジョン。なんでも物事がきれいに見るとか、やれなんだ、なんのために？ だれが？ どうして？ っていうことはもう問わない。問えない。なかでそういう物が、いいことっていうのが出来て行くわけですね。で、それに対して、ある小学校なんかですね、フレネ学級、（これは大泉学園ですけどもね。）そこでは、子供達が、ワープロを使って、印刷物を作ってるんですよ。ところが、このワープロというのは、古典的ワー



プロっていいのか、まさに、“あいうえお”からなんとか、字のこんな大きな板をね、自分でこうやって捨てるやつなんです。こうやって押すだけなんです。で、それはね、見ていると辛気くさいのなんのってね。誰か、なんとかちゃんというね、自分の名前を探しだすのに5分くらいこうやって、じーっとさがしてるんです。で、「ないわっ」とかなんとかいってるんですよ。で、僕も一緒に2、3分だけ探して「あ、やっぱりないね、そいじゃカナでかこうか」なんつってこうやってやってるんです。で、それで作っている。ぼくの研究室にはね、最新型のワープロがゴロゴロゴロゴロ捨ててあるんですよ。つまり、なんていうのか、とにかく、お金をもらっちゃうんでしょがないから買うっていうやつ。それはもう予算を消化するにはなんか買わなきゃなんないっていうんで買った。よっぽどそういうのを寄付しようかと思ったんですけども、それは絶対しっちゃいけないと思ったわけですね。つまりそれはTHEY的世界じゃないんですよ。彼らは彼らの世界の中に意味づけられた世界です。その時間を探し、そうやって文字を探し、自分の文字がないということに関係なくそこで一つの世界を時間をかけて、じっくり納得して、私ってものをそこに表していこうというね、そういう時間はやっぱりあのワープロでなきゃだめですね。チョチョチョンとやったらどうしようもない。そういうものは全部飛んじゃう。やっぱりそういうものなんです。ところが、我々の世界には、さっき言ったTHEY的な世界、つまり、誰が、あなたにというようなものがないけれどもいいはずだ、ということがものすごく蔓延している。で、我々がそういうことでもって子供を見たり、子供もそういうことに合わせようという風になっていく。そういうTHEY的世界というものがやっぱりすごいあってですね。そのTHEY的世界の論拠は何かというとまたTHEYなんです。だって流行ってるじゃないとか、だってこういうことになってるじゃないってように、THEY的な世界の原因型というか、その基になっている基準自身がTHEYなんです。そういう風なことになっている。で、やっぱりそれがまずいんだということですね。そこで僕の「内側から見る」っていうことは、ちょうどその正反対。内側からみていくっていうことは、実はそういう存在そのものの持つ、ユニークでなおかつ必然的で、しかもそれが本当に存在していること自身がしかり、これでいいんだという、That's all rightというその原点から、それはユニークであり、That's all rightなんだってということですね。それが他と同じだから That's all right ではなくて、それ自身がまさに個であることが That's all rightであるという、そこが基本的に内側というものから見るときに重要なポイントではないかということ。で、それに対して、やっぱり子供っていうものは、THEY的な眼差しの中で合わせなきゃいけないんじゃないかっていうことを、非常に強く圧迫されながら生きています。そういうところですね、我々はその子自身の中で、本当に自分の中の必然性、自分の存在の必然性というものを発見するゆとりというものがなかった。で、それを、もう一度

(3)“あなた”と  
出会う

再発見するっていうことに、異常に時間がかかる。

ま、ここで挙がっているのは、その愛育養護学校の例ですけれども、物をこう投げる、捨てる。要するにもう、あらゆる液体を、ビンの蓋を空けちゃうわけ。そういう時のことについて、その捨てるっていうことは、実は自分を捨ててもう一度作り直そうということなんです。ただ僕はここで、はっきりいうと、これは間違いなんで、直さなきゃいけない。ここでは「捨てる快感」があるという言い方をしていますが、実はそうじゃないですね。

これは岩崎先生なりに伺ったときにも、そうだったんですが、もう一度よく実際の様子を観察してみると、捨てながら泣いてるんですね。実にそれは、苦しいプロセスなんです。そんな簡単なことじゃないんですね。自分を本当に捨てるっていうか、それを、そのビンの中の物を捨てながら、実は、子供は泣いてるわけです。そういう中で、苦しみながら、そういう物を、やっぱり自分の中で自分を作り直す必然性というものを探求するっていうのは、これは大変なことだと。実は、大仕事でですね、必ずしもそんなに嬉しいプロセスとは限らない。しかし、それにもかかわらずやっぱりそこで、本当に自分にとってこれしかないというところで、やっぱりそういうことをやっていくという、そういうプロセスがあるということ。ま、後はいろんなことの意味を、一人一人がさまざまな意味っていうものを探索しながら、いろんな行為を作り出している。それはその子自身の内側に入りながら、それがその子自身がそのビンの中の液体になったり、それからその次の例では、穴を掘る、穴を作り出すという、そういう時のその子自身の、穴掘というプロセス自身の中に、この自分というものの存在をかけている。で、そこで自分を作り直そうとしているという、もう一つの自分というものがどこにあるのかということですね。さまざまな自分に全身をそこの中に投入した上で、本当に自分というのはどこにあったのかということを探り出すという、そういうプロセスがあるというわけです。で、実はそれを支える存在としての“あなた”というものがある。私はそれを、いわゆる、他者という言い方よりむしろやっぱり積極的に“あなた”という二人称で考えたいわけですね。で、その“あなた”との出会いというのは、これは非常にむずかしい。

これは、皆さん方のご専門なんですが、愛育の場合だと、最初に挙げてるのはですね、ある外側からの目に射つづけられた子供の場合に防波堤を作るという話がある。で、例えば、ある子は、木にのぼっちゃうんですね。もう園にきたらすぐ木の上ののぼっちゃって一日その木の上にいるわけです。そして、人を入れない。そこに入れまいとするわけです。あるいは、とにかく人のいないところ、とにかく自分自身行こうとする、墓場だとかですね。そういう、絶対に人がこないようなところへ自分を入れようとする。それはある意味じゃ、世の中にはそういう他者っていうものは全部自分を外側からみる存在としか捉えられない。で、そういう時には、もう絶望というか、本当に、なんていうん

かな、そういうところに排除するわけですね。だけどそういうときに、その排除しようという気持ちに一致した存在としての“あなた”というものが、それとなく、ずっとその場にいるっていうか、いてあげる。それはその子についてですね、THEY的にそんな一人になっちゃいけないんよとか、もっと寄ってらっしゃいという意味でいるんじゃないなくて、そこでその、人を退けようとしているその気持ちに一致してその場に存在するっていう。そういう人っていうもの。それが、“あなた”というものなんですね。それを発見するわけです。そうすると、例えば、最初のうちは木の上に手を伸ばしてあげてくれるっていうわけですね。こっちにいらっしゃいという。そして、あるいはその子が墓場に行こうとするときに、一緒に行こうとする。そういう風になった形で、それで、“あなた”という存在をこう受け容れていく。ま、それが一つの方法ですね。

で、もう一つは、逆の場合があるんですね。これは、常に周りの人をいつもいつも側に引っ張っていないと不安だという場合の人がいる。つまり、なんか自分から人が遠のいていくんじゃないかという恐怖を持っている。だからそばに人を寄せ付けておこうとして、相手になってくれそうな存在にどんどん付きまとって行く。で、そういう時には、やっぱり人が自分から離れてっちゃうんじゃないかっていう恐怖の中で戦っている。で、こういう時に、やっぱりThat's all right。ね、あなたが存在してるっていうこと自身がThat's all rightなんだって言うことで、こうやっぱり支えていく。そういう人が、ずーっといつづけるという中で、次第次第にそれを離していくようになる。つまり、今度逆にそういう人をむしろ、物理的にそばにいてくれないでもですね、そういういわば、遠ざけるわけじゃなくて、むしろ離れて、ほかのことができるようになっていくというような、そういう形での“あなた”というものを“自分”というものと、なんて言うのかな、別の存在であるにも係わらず両方が安心していい関係というものをそこで発見していくっていう。

で、今度別の子供は、物ともう徹底的に係わりあってですね、物にとにかく関わりあおうとする。つまり、“人”っていうのはもうこの世界にはない。まさに物だけだという。そういう物と関わりあっていくときに、自然にそのものに係わりあう。物を取ってくれるとか、物を渡すとかっていうときに、初めてもう一人の“あなた”っていうものに触れるっていうね。ま、僕もこの辺のことは、まだちゃんと整理もしてないんですが、やっぱり、いろんなタイプと、いろんなプロセスがあるという、そういう中で、とにかく“あなた”っていうものを発見するっていうのは、人間にとって大変な仕事だと。これは一生かかっていいことですね。えー、大変なことなんですねえ。

これは僕は最近では老人なんかの問題を考えた場合も、やっぱりおんなじですね。私の両親の場合のことを考えてもそうなんですが、やっぱり本当に“あなた”と呼ぶような関係を作らずにずーっと老人になってしまうと、ものすごく難しくなっていく。つまり、相手に期待をするにも係わらず、一方で、それ

をTHEY的に期待するというのかな、あなたは私の妻である以上はこうこうすべきであるという、THEY的な目でもってのインタラクションを期待する。本当の自分がその人に委ねるとのことじゃない。そういう、なんかこう、常にTHEY的なサポートの中での存在というものと関わりあおうとする形であって、YOUっていうのかな、本当の“あなた”との関わりというものをづくりだすっていうのはやっぱりこれは一生の仕事っていうのかな、大変なことなんです。けどそれはいろいろだから、いろんなプロセス、紆余曲折はあるけれども、やっぱり究極的には、あるいは常に、我々はやはり“あなた”っていうものとの関係の中で認識し、“あなた”との関わりの中で生きているという風に結局考えられるわけです。

(4) “あなた” への  
プレゼントー  
「知る」活動の  
原点

で、そういう、“あなた”っていうものの存在の意味はね、僕はそこから「知る」っていう活動が始まると思うわけです。それは、実は、プレゼントとしてという、なんかこの、そこで物っていうものの認識、さっき言った、物の内側にはいる認識というものが、ある意味じゃ、僕はプレゼントのようなものではないか。つまり、それをこう差し出すんだけど、この、あげるという感じ、あなたにあげるという感じですね。そして、あげるということは、自分の物をあなたにあげるということと、それから自分にとって本当にいいと思う、大事だと思えた物をあなたにあげるという、こういう風な感じですね。そして、自分にとっていいとか大事だと思うことっていうのは、やっぱり自分自身であったり、自分がそのなってみた物、お花になってみたら、お花をあなたにあげる。石になってみたら、石をあなたにあげる。そういうことが、なっただけという、なっただけをあなたにあげるっていうことの意味ですね。で、それは、やっぱり、同じように、あげるもの自身になろうじゃないかという呼び掛けでもある。で、こういう呼び掛けとして、プレゼントとして、そこに別の物、自分と相手と、それからもう一つの物という、その三者関係というのが出来るんじゃないか。で、それが、私には、知識というか、「知る」っていう営みが始まること、つまり、何かをあげたい、何かをこう作りだしたい。そして、作った物をあなたにあげたいという、そういう事がですね。これは、だから小さい子が、いろんな事を発見したことを持ってくるか、プレゼントしようとするか、あるいは、家庭の中でですね、話をしているときに、本当に、道ばたであったこととか、なんでもないことを話したくてしょうがないという気持ちになる。あるいは、自分で発見したことをそこで話題にしたいということが起こる。例えば、私の母なんかですね、湯川博士がノーベル賞とったときに、私には全然わからないにもかかわらずごく興奮して、小学校までいいにきた。そしてとにかく、湯川博士がノーベル賞とってすばらしいと言って。ま、僕は、そのとき興奮してるおふくろをなんともいえなく思い出しますが。とにかく、自分でああいいなと思ったときに、それを人にあげたいと思う、で、相手がそれを受け取ってくれるかどうかということが、場合によってはそれが見えなくなっ



で、とにかくあげようと思うという、それが「知る」という営みの原点ではないかと思うわけですね。つまり「知る」というのはものすごくあなたの活動だとか、つまり、単に事実がこうですよっていうことを伝えるっていうことではなくって、その喜びを共にしようという、そういうものとしての知識、「知る」という営みの原点をそこに考えてみたい。ま、基本的にはそういう考え方で、「知識」というのは「あなたにあげるもの」として捉えたいということがそこからでてくるということですね。

## 5. 「内側からみる」ことと認知科学

〔以下は参考として配られた佐伯氏の論文「『内側から育てる』教育」（シリーズ授業『障害児教育』1991、岩波、所収）を参照しながらの話し〕

### (1)知識の状況依存性と未解決の問題

で、二番目の論文の「『内側から育てる』教育」は、私は、今のことをもう少し現在の認知科学の現状との関係の中で位置づけし直しただけなのですが。それはつまり、さっきいきましたような、人間の認識をめぐる、マイケル・コールが盛んに言っていた、その「領域固有性」です。知識と言うものが状況や文化と非常に結びついているというね。だから、決してそのなんていうのかな、辞書みたいなものでもないし、ルールみたいなものでもないし、命題みたいなものでもなくて、どんな知識でも、どんな認識でも、非常に具体的なものだ。で、知識というのは、本質的に具体的だというね。抽象的とか形式的というのは、それは別に知識がそうなんじゃなくて、それを人に伝えるときにそういう言い方をする文化があると。そういう文化的な道具があるというだけの事であって、認識そのものはどこまでいっても、原点から何から本質的に具体的だというね。それがまあ、あの、その文化人類学だとか、やれ、いろんなところでですね、どんどんはっきりしてるかっていうそういう系統がある。

じゃあ、その具体的である状況、まさにその状況が重要なんだっていうんだけど、その状況ってなんなのかっていうことになる、従来研究ではそれがですね、まあ、一つのソビエト心理学ではそれは人間の活動なんだという言い方をしてみたり、レオンチェフとかヴィゴツキー、こういう人たちは活動ということが重要なんだ、と試してみたり、まあ、さらになんか、ソーシャルプラクティス、つまり、実践ですね、その文化として、さらに仕事として、どういう種類の仕事はその人の周辺の文化としてあるのだろうかというタスクのエンバイラメント（environment）が重要なんだとかですね、あるいは、職業的な、そのなんであるかとか。ま、人類学によって、いろんな捉え方があってですね。けどなんかもう一つその状況というものには非常に不思議なことがある、いろいろあってですね、わからない。(1)一つはですね、まず、いちばん大事なことは、ここに書きましたけれども、知識が状況に依存しているという状況とは何かという問題。つまり活動の流れとか、利用できる他者や道具だとかいっ

でもですね、なんか捉えどころがないっていうこと。(2)それから、もう一つは、なんで別の時にそれを使いたいという気が起こったり、別の世界ではちゃんと使ったりするだろうか、ということがわからない。で、(3)三番目にやっぱり、認識がですね、具体的な状況と最後まで結びついているというならば、その形式的操作だとかなんだとかっていうふうに発展するっていうのはどうということなのかっていうことはよくわからないという問題。(4)それからさらに、4番目が、個人差の問題。この辺の事がわからないんじゃないかっていうことだったんですね。それを僕は、こういう風な事がわからなくなるのはね、全部知識っていうものを外側の基準で分類し、外側の基準で規定してかかるから謎だらけになっちゃう。それをむしろ、思い切って全部内側から見てみるという形にしていくと、実は別にそう不思議でもなんでもない。あるいは、非常に状況に依存すると同時に個人に依存する。個人に依存すると同時に文化に依存する。で、いろんなそういう事がですね、内側からみていくことによって、わかってくるんじゃないかということが出てきたわけですね。

(2)中国残留孤児  
と植物のアイデ  
ンティティの重  
なり

それで、もう一回「たんぼぼになる」という話になってでてくるわけですが、ここんところで、僕は実は背後に一つ想定している実践があるんですね。それは、吉本さんという中国からの残留孤児の子弟を教える小学校の先生がいるわけです。(残念ながら、最近その卒業生が殺人を犯してちょっと新聞沙汰になって、吉本さんがその証人になったり、いろんな事がありましたけれど。)で、彼は実は植物についての授業をものすごく丁寧にするわけなんです。で、それを何故やるかっていうと、植物というもののもつですね、宇宙の始まりからそれが発生して、そして、地球の中でそれが、こうね、炭酸ガスに囲まれてる中で、それを養分にして、ほかの存在をこう助けるような酸素を生み出すという形でもって、非常に過酷な環境の中で、生命というものを生み出すという。で、それを植物のアイデンティティと彼はいうわけですね。で、その植物のアイデンティティ、植物が植物であるということをどうやって、こう何億年かけて貫いてきたか。で、それがいかにほかの存在に迷惑のかからない、むしろそれに喜びをもたらすように植物というのがずーっと自らを共存させ、そしてほかの動物やなんかの助けになりながら、自分たちを作っていったか。で、そのことと、中国の残留孤児のね、日本における存在の仕方というものを重ねて授業をやるわけですね。そしてその子供たちが、自分たちもその過酷な、決して自分を受け入れてくれるような環境じゃない中でですね、まさに過酷な状況というものを、我々なりの、その中国からきた子供らしさというものを、こう、その過酷な中でですね、ほかの日本人の子供でもない、中国にいる中国の子供でもないあり方というものを生み出しながら、それで、彼らの残留孤児というレッテルを貼られながら、彼らの彼らなりの日本人、彼らの中国人ですね、彼らなりの中国人性というもの、本土の中国人でない中国人性というものをつくり出すことをね、こう助けていく。これは大変な仕事なんですね。だけどそれをや



るときに実は植物の気持ちになる。植物の存在にこの自分のオリジンに戻るということを重ねてやっていくわけですね。要するに、中国の残留孤児たちが自分のアイデンティティを作るっていうことと、まさに植物の光合成、植物の進化を学習するっていうことがズバツツとかさなってるわけです。そしてこんなことは、我々の学校社会の中では非常にユニークといえばユニークなんですよ。

### (3)ボディ族の色 識別法

ところが僕は最近それは、文化の形態からいうと決してユニークではないとか、むしろ近代文化がそれをさせないことが変な意味でユニークだとか。それは、『認知科学選書』の第21巻にですね、福井勝義さん、みんぱく〔国立民俗学博物館〕の先生が、アフリカのボディ族というところに何年か入り込んでですね、ボディ族の人たちの牛の認識についての本（『認識と文化』1990、東大出版会）を書いたんです。で、それはどういふのかといいますと、非常に驚いた事があるんですよ。ボディ族の人たちにいわゆる色紙で、色の識別をこうやるわけですね。そうしますと、何10種類の色を全部ユニークに名前をボンボン言うんですよ。それがですね、どうも、ある時こういう色をパッと出しますとですね、名前がないというんですね。何故ないかときくとね、こんな色の牛がないというんですよ。自分は牛の色を聞いてるわけじゃなくて色の名前を聞いているのに、こんな色の牛いないなあと言うんですね。それで、ひょっとして、彼らは色見本を牛だとして、牛として理解してるんじゃないかと思ったんで、今度は彼は色のいわゆるマンセの色表じゃなくって模様を描いたんです。ガチャガチャガチャツツいろいろなスポットだとかやれ何だとか、それをこうしたら、色の時と同じように名前をボンボンボンボン言うんですよ。それでね、彼は驚いて、これは牛というものとして色を世界をみてる。色を見るだけじゃなくって、いろんなものを牛としてみてるんじゃないかという風な気がしたんです。それでいろいろ調べてみますと、彼らの生活がいろんな意味で、牛の生活と結びついてるんですね。で、さらに、彼らは一種の遺伝学を持ってるんですね。つまりどの牛とどの牛、どのスポットとどのスポットはどういう親類関係になってるとか。で、親類関係になってるっていうのはですね、何をかけあわせると何がでてくるっていうメンデルの法則なんか全部知ってるですよ。別に学校で習ったわけじゃない。それだけじゃなくって、メンデルの法則では全然規定されていないことも彼らは法則として持っています。それについては最近、家畜遺伝学というものがちゃんとあって、そういうメンデルの法則には載っていないことの法則を調べている。そこの人に調べてもらうと正しいってわけです。彼らは、家畜遺伝学、まさに現代の生物学の最高峰といえるようなものを日常生活で知っているんですね。そして、自分についてもそうなんです。自分自身の先祖の先祖の先祖の先祖っていうか、なんですか、10代くらい前の先祖からはじまって自分が今どういう存在なのかを全部家系を語るんですね。で、さらに、牛一匹について、その牛はどこのどういう牛から

生まれてどこから来てどういう風になったということを全部知っているわけです。ところが、彼らにはぜんぜん文字がない。記録する方法がないにも関わらず、それを全部知っているし、何回聞いても間違いがないし、他の人に聞いても間違いがない。で、それは全部正しいんですね。そういう事なので、いろいろな物を見るときに、系統的にみるというときには、牛の例に合わせて物事を系統的にみる。植物も系統的にみるときに、牛の系統と重ね合わせて系統的にみるわけですね。で、彼らは人の名前も牛の名前もみんな色の名前なんですよ。だから、太郎ちゃんとか花子さんとかっていう、そういう固有名詞が存在しないんですね。なにになになになにに色と、こう言う。で、その色っていうのは、その牛の“ぶち”とかやれなんだっていうこういう事ですね。で、“あなた”は、もちろんそこは若干ロマンチックなですね、明け方の何とかの牛の色でな、こんな感じのがあるんですよ。何がなんだか、その辺が非常に、ただ、いわゆる記述なんです。それが名前なんです。固有名詞なんですね。

で、そういう世界で生きているわけですが。あるとき、色見本を見せたら、赤い色を見た少女、少女というかお姉さんというか、分かりませんが、こう突然ハラハラと泣くんですね。そして、その色見本を顔にグーッとくっつけて、ハラハラ泣いているんです。それで、どうしたのっていったら、「この色は私の色だ」と言ったんです。それでね、これはいったい何事だと思ったわけですよ。それで育ち方をずーっと見ますと、生まれたときに、その人に、「あなたは、これこれこういう色の子供なんだ」と言う、その人に特有の色を与えられるんです。で、その色の牛を今度探すわけですね。何年もかかって探すわけです。そして、どこそこ村にその色の牛がいたっていうと、それこそ周りの人達が助けて、何頭かの牛をそこに寄付して、その牛を頂いて来るわけです。そして、その頂いてきた牛を、その人が世話をし、そして、その牛から子供をつくらせ、やれなにっていうこと。その自分の牛っていうものは、場合によっては、何年も何年も本当はない場合もある。あるいはすぐそばにある場合もある。たまたまそういう風な事で、自分の牛っていうものをもらうわけですね。そうするとその牛でもって、ゲームもすれば、詩も作る、歌も作る、朗々とそれを毎晩毎晩歌い合うわけです。自分の牛について、自分の色について。自分の牛の色についての模様、色っていうより模様ですね。その模様に全部固有名詞がついているわけです。固有っていうか、いわゆる赤とか青とかと同じように、こんな何とか模様みたいなものにちゃんと名前がついているわけですね。で、そういうものを自分でもらうと、それについての詩を作り、歌を作り、物語を作って、朗々と語るわけです。そういう風にして自分の牛っていうものを基準にしながら世界をズーッと見ていくわけですね。世界がどうなっているかということ。それを、自分の牛の系統だとか、その成り立ちだとか、階層構造だとかというものが、論理っていうのかな、物事を推論したり、論理のモデルになるわけですね。そういう風になっている。じゃ、その牛が死んだらどうなるかっ



て訳ですよ。そうするとですね、まあ、女性の話は聞いてないのでどうなるか分からないですがね、男性の場合は、本当に一週間くらい半狂乱になるわけです。で、その後どうするかっていうと、放浪の旅に出るわけです。そして何をするかっていうと、他の部族の人を殺して来るわけです。一人殺して来る。そしてそのペニスを持ってかえって来るわけです。それで初めて心がおさまる。で、それを社会が受け入れてですね、彼は、自分の牛が死んだ後、そういう事をやってきた人間で、で、彼はその後はもちろん自分の牛の色はありますけれども、こだわる事なくずーっとあの、あれ。だから、その部族は人を殺す部族だってんで、周りの部族から怖がられていたのね。だけど彼らにしてみれば人を殺すっていうのはどうしても必要だった訳です。牛が死ぬんだから。どうしようもないんですよ。おさまりがつかないんですね。自分の牛が死ぬってことが。で、それを、部族として、やっぱり受け入れてくっていう、そういう関係なんですね。

(4)「もうひとり  
のわたし」にな  
る

ま、そういう事はそれとして、僕の言いたかったのは、実は、中国人の残留孤児の子供に、その植物を教えて、そして植物が本当に自分の生きる生きざまというものと結び付ける形でもって、植物についての光合成だとか、進化だとか、植物と動物との共生関係だとか、生態系だとかというものを理解していく。で、それを吉本先生は教育としてやっておられる。で、それを学びながら子供達は、自分の生き方っていうものを、そこで徹底的に追求し吟味していく。それは決して、なんて言うのかな、不思議なことでも異様な事でもなく、今あげたボディ族は、それをもっと極端にやっている。で、そういう事が人間にとって「知る」っていうことの、最も根源的な原点なんだっていうことをですね、僕なりにしっかり押さえないといけないんじゃないか。で、それが自分が何かになる。なってみるということの非常に重要な、なんていうのかな、自分自身がもう一つそこで、本当にその自分の成り立ち、自分が生まれ育ち、この世に発生したこと。そのことが、That's all rightということ。そのことを、本当に自覚するっていうのかな。そういう事自身をこう辿り直すということ、やっぱり、私達は物になるということを通してやっていくんだということですね。で、それを、僕はここでですね、考えたいわけです。で、それはですから、ある意味じゃあそれをこう作っていくときにさっきのボディ族の場合も、それから吉本先生の植物の時もそうですが、その時の舞台装置だとかね、登場人物だとか、相手役とかっていう形でもって変わっていく知識と呼ばれるものが、統合されていく。でもそれは科学として統合されていくわけじゃなくって、その必然性の中でそれが位置づいていくってことなんだと。ま、そういう風なこととして、僕なりに考えたいわけです。

(4)第1の社会性  
の形式－YOUと  
の関係をコアと  
して

そして、もう一度僕は“あなた”の存在というものをとりあげている。それは結局、そういうもう一つの人生を生きる、自分がいま生きている人生っていうものと違う人生というものをもう一つそこで生き直すことが出来るということ

とを発見する。それが、実は“あなた”の存在というものの役割で、それは、その他人が私の中にもう一つの人生を生きてくれるっていう事を我々が経験することによって、それに答えるという中で、私達がもう一つの人生を生きるということが出て来る。で、そこで、プレゼントしたい、その人にあげたい物っていうのがでてくる。その人と私とが、その人と私と以外のもう一つの人生っていうのをそこで発見し、それをあなたにあげ、私もその中でもう一つ生き直そうという、そういう事として、贈るものとしての、プレゼントとしての、「知る」という営みがあるんじゃないか。これが、私は重要なことで、それを私は、「第1の社会性」Socializationと呼んでいるわけです。これを何故、僕は第1のっていうかって言うと、認識の発達っていうのは、Socializationだっていう理論が、発達心理学のベースにあるんですね。人間が、社会的なっていうか、お行儀が良くなる、人とうまくやっていける、世の中の仕事がちゃんとできるようになっていくっていうことが、発達だと。だけど、僕はそうじゃないと、一番最初の社会性は、“あなた”っていうものを、本当にちゃんと“あなた”との関係として、関係が出来ること。そしてその人にプレゼントとしての「知る」という営みを、共有していこうとする。これが第1の社会性というものであろう。

(6)第2の社会性  
への発展 —  
THEY的世界へ

じゃあ、その行儀が良くなるお手伝いをする、人とうまくやっていく、喧嘩をしない、Conflict Resolutionする、論理的、理性的に物事を処理するとはなんなのかっていうこと。で、これは、私はその次にでて来る。そこんところで僕は、ヴィゴツキーの考えが入って来る。つまり、社会は社会のノルム (norm) がある。だけど、今までは、それをね、なんていうのかな、社会のノルムをいきなり子供にバーンとぶつけるなり、ぶつけちゃまずいからそれを小出しにしてぶつけることによって、なんか、小出しにすればね、学習するんじゃないかっていう発想になりがちなんですよ。で、それを僕は、Teaching machine のプログラム学習がなぜ駄目なのかっていうときに、一所懸命考えた事と関係してくるわけですけれども。それは違うと思うんですね。つまり、小出しにして馴染ませるといことと、それを本当に受け入れる形でもって、こう学びとるといこととは、本質的に違うと。で、それが現在の発達心理学の中でもですね、混同があるように思うんですよ。つまり、人間の認識が社会的なんだってよく言う人は、その社会性を獲得するためには、ブート・スラッピングというような事を言うわけですね。つまり、なるべくそのほかの事が出来ないような、しないでもいいような、やりやすい環境にいれてやると、そういう事をやる。それから段々段々それを離してやれば、どの社会、どの文化でもそれがちゃんときえるようになる。それが成長であり、発達であるという。で、僕は、そうじゃないと思うわけです。そうじゃなくって、そのいわゆる文化としての社会性というのを獲得するのはどういう事かっていったら、ここに書いてある、実は、「おとな」というものを背負っている“あなた”の存在。で、これが、ここ

で僕が分かったのは、愛育養護学校の先生がたです。それが、もう、本当に葛藤するわけですよ。つまり、この子達は、どっちみちいつかは社会に出ないといけない。その時、他の人の社会的な規則だとか、時間だとかっていうものを守らなくちゃならない。でも、それをやったんじゃあ、この子供とIとYOUとの関係が作れない。どうしようかっていうことは、やっぱりあるわけですね。で、その時に、色々伺ってみると分かるのはですね、実はそういう葛藤の中で、先生方自身が実は学んでいるっていうことですね。つまり、そういう事を通して、自分はどっちを選ぶかの問題じゃなくて、自分達が生きている大人の世界にも本当にYOU的な関係、IとYOUとの関係っていうものが大事なんだ。で、そういうものを貫いていくことが大事なんだ。けども、それが非常に貫きにくい環境の中で、それをうまく貫いていくには、よほどしっかりしてなくちゃならないという。そして、それを貫きながらもなおかつそこでうまくやっていくという、そういう事が、私の大人としての生き方っていうものがそこであるんだと。で、また、場合によってはそういうディメンションですね、YOU的な関係をコア(核)にしたTHEY的な文化っていうものが、THEYの世界でなきゃいけないということむしろ社会に訴えていこうという。これは例えば、養護学校の子供達を公園に連れていったり、バスに乗せたりしたときに、むしろそれを、文化や社会に対してのですね、むしろ訴えとしてやっていると。つまり、私達の生きざまっていうものを文化的に認めていかせていこうという、むしろ積極的な意味をもった活動としてそれをやる。で、そういう事を子供が感じていくわけですね。で、そういう、大人が背負っている十字架を子供が感じ取って、その十字架を私に下さいと言い出す。で、それが、なんていうか、子供の側で、あなたの背負っている重荷を私も一部担おうという。で、それが“あなた”を通したもう一つの社会性ですね。それを、私は、「第2の社会性」Second Socializationっていうんです。第2の社会性っていうのは、社会の中で、良心的なっていうか、“あなた”と呼ぶべき、本当に大切な大人が、そこで背負っている重荷、その中で闘っていること、その中で苦しんでいること、でも、そうやって一所懸命すばらしく生きていること。その重荷を本当に少し私に下さいという風な形でそれを担い直したときに第2の社会性が生まれるだろうと。で、そうすると、気配りをする、お手伝いをする、それから、世話をし始める。いろんな事がこう積極的に、それを本当に自分の気持ちの中からそれを始めるっていうことが起こる。これが、まあ、愛育養護の中では実際におこっているわけですね。で、それが、重要なのが、全部最初の、First orderedのSocialization、第1の社会性というものが徹底的に出来上がったときに、初めて自然に生まれることであって、それを、逆転させようとする事によって、それはむしろ破壊されてしまい、おかしくなっていく。僕は、それが愛育がやっていることの意味だと思うし、それは僕は、もう、人間にとって最も重要な、先ほどから言ってる、「知る」っていう営みがYOUを何故通す

のか、“あなた”っていう存在がなぜ必要なのか。“あなた”っていう存在、わが身を開くっていうことと、それから物になるということと、それから知っていくっていうこととがですね、どういうふうに関係してるんだろうかっていう部分について、まあ、私なりに一つの見通しをつかんだというところなんです。まあ、だいたいそんなところで、ちょっと時間超しちゃったけど、終わりたいと思います。

中野

どうもありがとうございました。なかなか示唆に富んだお話で、有難うございました。ここで、あまり長い時間はとりませんけれども、少し休憩して、ひきつづき質疑、意見交換をしていきたいと思います。

---

客観的「知識」 — 星野

「知る」営み — 「あなた」の存在のつながりは？

私は、どなたもおっしゃらないと思いながら思ったんですが、正直なところ、なんか、もう、毒気に当てられたような感じで、何か言いたいんだけど、と思いながら。先程から話の中で、「知識」ということと、「知る」ということが、こう混在しているような感じで、出てくるんですけども。例えば、先ほどのタンポポあるいは牛を知っていくという、知識としてというのかな、何か分かっていくということと、そのことをプレゼントするみたいな事がありますけれど、そのことを通して、今度は、人を知る、分かっていくということと、何か接点があるようなふうに私聞いていたんですね。そのところをもう少し具体的に、何かお教え願いたいと思うんですけども。

佐伯

まあ、一つははっきり言えることは、僕は知識っていうのは、なんていうのかな、その名詞としてとらえるのは全く人工的なことで、本当は全部動詞だと、「知る」という活動があるという。ただ、まあ、なんて言うのかな、そういう活動のやり取りを、我々が外側から眺めたり、なんかなんとか言わなきゃならないときに、どうしてもなんとなく名詞化して言いたくなることがあって、その時に、しょうがないから、知識と呼んでいるものであって、そういうものが、実体として、なんかあるわけじゃないと。実体としてあるのは、やっぱり、活動としての知っていくこうとする営みがあると。で、その知っていくこうという背後にね、私は、語りかけている他者、“あなた”っていうのがいると。つまり、全く、なんて言うのかな、孤独な中で、他者が存在していないならば、「知る」ということは、物事をこうなんなんだろうかだとか、分かっていこうかっていう活動は、全然ないだろうと。つまり、それは意味が無いっていうのかな、そういうことをやらなくなるだろうと。つまり、我々なんか知ろうというのはね、誰かになにか語りた。そして、語りたし、誰かとなんかある世界を共有し



たいと。で、共有したいからであり、語りたからである。で、その時の生み出そうとする世界は、私にとっても新鮮な新しいものであり、また、相手にとって、“あなた”にとっても、新しい新鮮なものである。で、そういうものをそこで作り出したというね。で、そういう世界へのよびかけの言葉というものが、僕は知識だという風に考えたいわけですね。その意味で、“あなた”っていうものが、「知る」っていう営みの前提として必要だろうという風に考えるし、で、それは別に知識っていうのを、バレーボールのボールみたいにね、こうただ渡してるといような意味ではなくって、そこでこう、一つの分かっというところとする世界の提案だとか、そういう言葉だとかね、そういう風に考えたいんです。で、そういう、他者とか“あなた”っていうものを、さっき最初にいった、その原型はそういうこの“あなた”への語りであり、“あなた”と共にしたい、“あなた”にあげる、共に喜びたい、一つの世界を広げる提案として出されるものですが、それが段々“あなた”が他の“あなた”、いろんな“あなた”があるっていうのかな。あるいは、さまざまな人の中に“あなた”を見るようになるとかね。それから、その“あなた”が生きようとしている世界が、私のためとかなんとかじゃなくて、それはそれなりのユニーク性を持っているという風なことがわかったときに、その存在の持つ、あり方っていうものにたいしての配慮っていうものがでてくる。で、それが、いわゆる、我々がいう意味での客観的と呼ぶようなね、知識。ま、我々とか、外側から、いままで言われている意味での客観的な知識の獲得というのは、そういうものだという風に考えるわけですね。だから、本当の意味で、純粋な意味での客観的な知識っていうのは、僕は世の中にないとか、全部がある人との関係の中で思いいれをもっている。ただ人は、自分が勝手に思った人でもないし、自分にとって都合のいい人でもない。で、いろんな人っていうのがあって、しかも、それが非常に“あなた”としての存在として、可能性を持っているものとして。そう考えたときに、そういうもののあり方っていうものに対して、配慮をしていく。そういうこととして、論理性だとか、いわゆる分別という様なものをね、社会の文化的な実践の中からくみ取っておこうとしていく。でもそれは、結果的な意味での客観性であって、その人自身の中ではね、ある意味での、自分のとか、“私”っていうものが常にぶつかり合っている。そういう思い入れがあるだろうと思うわけですね。

星野

ここにあるもの、このものを介在して、“あなた”に伝えていく。

佐伯

そうそうそう。

星野

これは誰かにやって欲しいとか。私はここがこうだと言うことで、伝えていくということ。そこで、YOUが出てくるということだと思うんですが、そう

すると、それはYOUが先にあるということだとか、そういう問題ではないということですかね。

佐伯

うーん。

星野

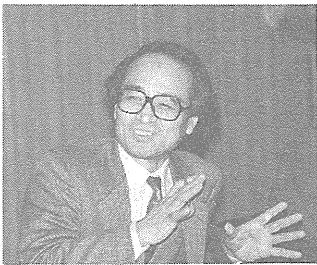
IとYOUとの関係があったらこれはいけるとか、そんな風なレベルの問題じゃなくって、要は、こうなんていうのか、存在しながら・・・

佐伯

うーん。どっちが先っていうことがね、簡単に言えないのは、非常に健全に発達すればですね、赤ん坊にまず母親というYOUがあるわけですね。で、そこでは知識もなんにもないわけですね。で、母親と共有しようとする世界を広げようという形でもって、ある発見なり何なりというものが、その母親に語りたいたいというか、訴えたいものとして、「ああ、こここうよ。」っていうものを、なんかこう訴えかける。あるいは、母親の方で訴えかけているものを、なんかそこで広がる世界として、母親との世界が広がる形でもってそこで作っていく。それはすごく自然なんですけどね。ただ、僕はそれが本当に一番いいという感じもするんですが、さっき言ったように、それがまるっきり絶望的に、YOUそのものがまるっきり無いような関係で育っちゃう場合も起こるわけですね。で、そういう場合、YOUの方が、発見されていくわけですよ。逆に。だから、どっちがどうっていう風なこと、いわゆる法則化がなかなか出来ないと思うんですね。ただ、そこらの、円環的っていうか、総合的につながって広がっていくんだということは、僕は、どんなに年食ったって同じだろうと。その構造自身は、死ぬまで同じじゃないかなと思うんですよ。

ものとの関係は？

星野



私は今、ものが充ちあふれている時代ですね。そして片一方で人がどっかに消えていくような時代になって、そう思ったときに、人と共にあるということをもいつも頭におきながら、それだけではいかないだろうと。物と同等にあるかってことも考えざるをえないだろうと。そういう説明ってされたことがないだろう。そのときに物と共にあることがやっぱり人と共にあるっていう、あえていうと、関係になっていかないと。やっぱり人間ではなくなっちゃうだろうと。

佐伯

そうそう。

星野

そう思うもんですから、今、私聞きながら何かちょっとヒントをもらったなっていう感じがして、なんか、ちょっと楽観的にみてもいいのかなっていう感じはしておるんですけども。

佐伯

いや、だから僕はその辺がね、それこそ工学系の人間としては、どうしてそ

うやってIとYOUとの関係を見殺したね、物がまさに、どかどかと踏み込んで来たのかっていうね、これは非常に問題なんですよ。ただ、なんか、例えば、ワープロひとつでもね、最初に来るときは、すごくパーソナルに来るんですね。つまり、ある人がフッと思い付くときはすごく自分の生活、あるいは誰かの生活をコンクリートに（具体的に）思い描いて、「ああ、これ、すごくいい世界じゃない」というね、まさにプレゼントとしての発明があるんですね。ところが、それが、商業ベースに乗り出すと、いわゆる商品寿命がものすごく短いですよ。もうだいたいワープロにしろカメラにしろ掃除機にしろ、そういう新しいものは作っても本当に半年も持たないんですね。そうするとですね、付加価値というものをどうしても付けるわけです。そうすると、無駄なだけども、まあ、ついてると面白そうなものっていうのは、まるっきり関係ないものをどかーんどかーんとかう付け足していくわけです。それがさっき言ったTHEY的な、誰のためとあえて問わないんだけど、まああるとききれいじゃないっていうような感じのものをぼんぼんぼんぼん付けていくわけですね。で、それで商品寿命を少しのぼせそうとすることが起こるわけです。で、結果的に、そのいたちごとこと言うか、そういうことばかりやって後手後手のものが世の中に、どんどん広がってきちゃって、我々はそれを買われているっていうね、そういう構図になっちゃって。で、やっぱり本当のこと言うと、いったん全部掃除しちゃって、本当、何も無い世界から始めるという手もあるしね。なんか考え直さないといけないうね。物との関係ってのは、ものすごい異常になっていますよ、今。



星野

ありがとうございました。

子供からの「知」  
のプレゼントの  
一例

メリット

あの、先生のお話と接点があるかどうかわかりませんが、ちょっと、物になる、そのプレゼントと一緒に考えてとかなんとか。モーリス・センダックという人の子どもの絵本の「A HOLE IS TO DIG」。その子供は、そのホール（穴）になっててそしてそのことによって、その自覚によって私たちにプレゼントしてくれました、その子供が。あはあー、子供にとっては、ホールはこのものだったかとか、なるほどということを私にプレゼントしてくれました。そういうような例はどうか。

佐伯

そうですね。だから私たちは子供というのが、その本当に物になってみるということをおぼえていることをね、やってくれることによって、私たちにとてもビッグ・プレゼントになるわけですね。はい。それをまた、子供自身が、そういうことが出来ることを自覚することによって、その人がその人であることを、その子供がその子供であることを、その子自身が自覚するというね。そういう関係だと思いますね。

欧米的思考と日  
本人の思考—  
「なる」ことの違い

竹内

とても面白かったですね。ズーっと自分が考えてきたものと重なりあうところが沢山あるから面白いんだけど、それと同時にね、自分が、これは難しいと、出来ないと長年思ってることを、佐伯さんは出来るといわれるということは、どういう風になるのかなあということで、いくつかの点で、これから考えていきたいといった事があるんですね。で、感想からいうと、僕みたいに、日本から出て生活したことのない者からみると、ヨーロッパ的というか、アメリカ的というかね、そういう思考方法で、日本人のからだが考えてるっていう感じがまず第一にした。

佐伯

ほう。

竹内

一般的な印象をいうと。それは、どういうところから来るかっていいますとね、私は、ま、佐伯さんは「物になる」っていうところから始められたけれども、「人の身になる」っていうことはどういうことかっていうことを、ここ十年来考えているわけです。で、それはね、佐伯さんの考えた事と重なるところもあるし、重ならないところもあるし、まあ、ちょっと整理してみないとなんとも、今一言では言えないんですけども。それでね、まず第一に、これは、私は演劇の出身だから、演技論から始まっているわけですがけれども、物になる、あるいは人になるっていう考え方は、ヨーロッパの演技論ではいっさい無いということですね。まずね。なんということはない、ありえないわけです。演技とはひとつの〔固定した〕主体がプレイすることであってね。だからたとえば佐伯さんがここに一番最初に書いてある「なる」っていうことは、対象になってる「もの」とは直接には関係ない、イメージーションとして言っているだけだと理解するだろう。ところが、日本の場合にはね、演技というものの一番基本は「物になりいる」ことなんですよ。それはもう、世阿弥以来の伝統でね。物になる、人になる。どこまでなり入れるかということの勝負である。ということがあって、その狭間で僕は戦後演技論をね、ま、専門に考えてきたように思っているんですけども、ズーっと苦しんできた。それで、数年前教えていただいたギブソンの心理学のaffordanceという考え方っていうのは私には非常に面白いわけですがけれども。私もアクションという問題としてズーっと考えてきてるわけですね。ビヘヴィア (behaviour) じゃなくってアクションということを考えてきている。そうすると、アクションという場合、主体という問題が必ず難しい問題として現れてくる。ヨーロッパ人のいってる理論をそのまま日本人の身体でひきうけると、どっかで大きく食い違ってしまうという、そこところをものすごく感じるわけです。ですから今の佐伯さんの「なる」という話が、とってもよくわかる。とうとう理論上もその問題まで来たかという思いもある。と同時にね、ひょっとすると、そこが日本人としての盲点ではな

いかって一步踏みとどまりたいという思いも私にはあるわけですね。それが一つなんです。

それからおんなじように、日本人として考えるっていうことなんだけども、“あなた”というものが、現われてくるっていいですか、(筋道としては非常に僕は面白かったんですが)「なる」というところから“あなた”というものが生まれて来る筋道についてですが。日本人の場合に、本当に、“あなた”っていうものが“他者”という存在として現われるということは、どのようにしたら可能かということですね。下手をすると、自分へのとりこみか、自分の投影か、でなければ、まったくの他界のもんということになってしまっただけ。いま相手が他者としての“あなた”、としてちゃんと成り立つかどうかということに、非常に難しさを感じるのです。佐伯さんの先ほど言われたYOUは、ひょっとすると障害児にとっては、今まで怖かった外の世界のある部分だけが自分にとって寛容になった、受け入れてくれた、ということに過ぎないのじゃないかと、私自身の言語障害の体験から見て、思うのです。YOUが、私のためでない、全く別のユニーク性をもつ存在、ひとつのマイクロコスモスあるいは人格であることは、どこからわかり始めるのだろうか。それはプレゼントという概念やいくつかの言い方によって提示されているのかも知れないけれど、まだ十分にはわかりません。これは今日質問するんじゃなくて、僕が感じたことだけ申し上げて、これから一緒に考えていきたい。で、三番目に、2人称の世界というものを、本当にコアにしながら、3人称の世界(そういう言葉で言っているんですか?)ということを考えてゆく。ぼくは本当にその通りだと思うんです。だけど、それはものすごく大変なことですね。それとさっき大人としての十字架という言い方をされたけれども、本当にそうだろう。それが例えばブーバーなんかに言わせれば、我-汝、私とあなた(あなたと訳していいのかなあ、ちょっとわかりませんが)「私とあなた」というのと「私とそれ」という形ですね。社会の中で、「私とあなた」という関係が成り立ったら、それは即座に「我-それ」の関係に変質してしまう。それを、どうしたらいいか。まあいまそれ以上の事ははっきり言えないんです。その辺の事は専門家もいらっしやるからうかがいたいけれど、そこところが、本当に十字架と言いたいくらい難しい、という風に私は今思ってるんですね。私はなんか、2人称の世界が、この世の中にほとんど無い、だけどそこところが無ければ生きられないという感じで、それをある場で見つけ出すっていうか作り出すっていうことに一所懸命かけてきたような気がする。けども、2人称の世界をつくり出したらばそれですむかというわけにはいかないわけですね。

佐伯

ああそうですね。

竹内

その先がね、どうなるかってのを、今とっても大変でそれをどういう風に考

えたらいいか。THEYの世界ですね、その第2 接面と言いますか、そういうことと、自分が悩んできたことが非常にこうシャープに切り結ぶんだけども、いまどういう風に質問するか、私そこまで言葉になりませんですけども、そういう感想を持ったということだけお話したかったわけです。

佐伯

そうですねえ。僕は本当、今回のはなんか飛石みたいな感じだね。なんとなく、こういう所、コアっていうか、なんていうか、そういうところをこう飛石的に、直感で、置いておいたという感じなんですよ。自分なりにきちっとこれから時間をかけて埋めていかなければならない。

竹内

一番最初の「なる」っていうことに戻りますと、ヨーロッパ人が「なる」っていうことをやろうとすると、このままの顔じゃ出来ないんですよね。仮面を付けなきゃできない。中性の仮面つまりNEUTRALな仮面を付ける。付けたことによって、なんかになる原点に自分をたたせるっていうか、ある意味で、透明なものになる。そこからならなれる。この身のまま出発することはね、ほとんど不可能っていうのが、いままで僕の知っている限りでのヨーロッパ人の演技の組み立てね。だから私は、途中から、ああ佐伯さんはやっぱり日本人なんだな、そういう風に思ったりした。

佐伯

いや、だからね、これは要するに、英語で説明できないんですよね。

竹内

だと思えます。

佐伯

だからね、本をかけたか論文をかけたといわれても、何度も苦闘したんですがね、説明できないんですね。

竹内

NEUTRALな仮面を付けなければそこへいけないということだから。言葉においても、ワンクッションおかないとたぶん言葉にならないだろうという風に思う。よくわかります。

「内側からみる」  
ことと「なる」  
こととは同じか？

山口

あの、先生は「内側からみる」ということと、「それになる」ということと同じだと考えてらっしゃる？

佐伯

そうですね。

山口

同じだと。

佐伯

ええ。「なる」という言い方だとその目が内側に向いちゃってますからね、



僕は「なる」ということは外に目が向くことだと思っているわけですね。それがあえて、なんていうのかな、それを内側から外を見るというそういう。

竹内

僕ははじめ読んだときわからなかったんだけど、ここに佐伯さんにあってみて、本当にそうだと思うね。「なる」というのは、そのものの目で世界を見つめるということ・・・

佐伯

そうです。そういうことなんですよ。

竹内

普通「なる」というとそうじゃなくって、

佐伯

内側からっていうと、それになればいいんだろっていう風にとらえちゃうんでね、

竹内

その日本の人の習慣はかなり、しつこい習慣だね。

佐伯

そうそう。らしくなればいいんじゃないっていうね。そういう風になっちゃって、

竹内

結局、それは外からみたものになる。

佐伯

なってるだけだからね。そういう意味じゃないっていうことを、敢えて言おうと思って、内側から見るっていう言い方をしたわけです。

竹内

どうも、横から口だして・・・

山口

「なる」というその時の問題で、なり続けるっていった時に、もう、例えば、自分の場合だと、なり続けると、自分の中にイマジネーションというかファンタジーの様なものがすごく動き出すんですね。非常に自由になるっていいですかね。そのものに自分になってしまえばね。なるために、内側からって外がどう見えるかとか、あるいは、一つひとつの模様だとか特徴だとかが自分にとってどういう物であるかっていうか。これはなにかPROJECTIONが働いてて、要するに自分の世界を見ていくことになると思うんですけども。で、最終的になってしまうと、私になってしまうというか。そんな風なことが自分の中に起こる。見ている方はなんなのかっていうと、自分を見ている。そんな風なことも起こるんですけども、それと、この「内側からみる」それから「なる」といったことは同じことなんですか？それとも違うことなんですか？

佐伯

はあー。それは非常に、うーん、いや、その「なる」というところのコアというのがね、なんというのかな、そのいわば対象になるというときの、なったときのコアっていうものがね、結局、玉葱みたいなもので、たとえば、「私がマイクروفोनになる」とか「私が蝶蝶になる」とか「私が花になる」時の、そのなったときの、自分になっているその中心というものが、いろんな意味で、ダイナミックにかわるわけですよ。だから、それに応じて、いわば、その第2説明みたいなものを、はっきりとここから外は外なんだっていうことをね、意識してなっている場合は、まさに「私はなにになにちゃん」になって外を見回すと、お母さんが見えた、やれ??? 見えたっていう風になっちゃうわけですね。だけど、その何ちゃん何ちゃんを成り立たせているもう一つ、なんていうのかな、ぐーっと奥の方の「なる」ということもあると、じつは、なにになにちゃん自身の世界というものもそのいわば外になると。だからその辺はね、ある意味で中心っていうものは、玉葱みたいなもので、どこから外であり、どこから内であるということがいえない。場合によっちゃあ、そのなにになにちゃんを含んでいる社会というか家庭というものが、なる対象になる場合もあるとかね。いろんなものになっていくとき、広がって行ってその外側と内側との関係といったものが見えてきたりすると。それを、こう、奥の方にずーっと入っていく場合もあれば、外に出ていく場合もあるっていうわけ。だから、僕はその辺が固定的に考えちゃいけないということだけは確かだと思うんだけど、本質的に、「内側からみる」という言い方がまずいというよりも、その内側というのが、どこから何が内側でそこからどこが外側ということは、それはなりながらね、探究しつつ変えているんだという風にとらえられると思うんですけどね。

山口

そのことについては、私は、これを全部ちゃんと読んで、今日渡されたもので、まだ充分理解できてないんですけども、内側からみるのも、外側からみるのも同じじゃないかなあ、「なる」ということとの間に違いがあるだけで、内側からみるのも外側からみるのもいってみると、ここでは第三者としてみてるだけに過ぎないんじゃないかなあっていう風な思いすら浮かんでしまうんですね。先生が使っておられるその「内側からみる」というのが、私はきちっと読み取れていないので、すぐはじめはもういろんなデータのところでみているのかなあと考えたんですけども、本当にこれが「なる」ことなんだろうかなという風に思ったりして、なんかその、やっぱり「内側からみる」にしても「外側からみる」にしても、やっぱりある種の、先生がいわれているようなところでいくと、第三者としてみるといいますかね、そんな風なところが、そういう目が失われていただけのことで、同じ目でみているような感じがしてしまう。それと「なる」ということとの関係がよく私には理解できない。例えばあの、CONFLUENT EDUCATIONの、その認知的な部分と動的な部分とを両立させていくときに、それは何かになっていくという教育実践をいくつか知っ





ているんですけども。例えば、豆になってみて、で、その前にずーっと豆のいろんな部分を調べるといいますかね、解剖したり、それからその差異を知ったりして、頭で知的に理解する。外側から眺めていくといろんな傷があったりそして、頭で知ることがわかっていく。そしたら、自分が豆になってみて、そして、あの、湿気があったりなんかして、豆になりきって動いていくときは、もう自分の世界の中で動いているわけですよね。で、そこから外側を見ること、客観的な外側とは一致しなくても全く構わないわけで、そこにその人の世界が展開するし、それを通して自分っていったものが知れてくるし、ま、自分と外との関わりみたいなものはっきりと見えてくるという風な事がある。これはいったいその「内側からみる」のかあるいは「なる」のか。なんなのかなあとということが私はよく、最初の方しか読んでないので区別がつかないのかもわからないですけどもごちゃごちゃしてしまったというんですかね。

#### 佐伯

僕流にそれをいうと、やっぱりそれは、あの、むしろあなたのというような意味での「なる」というのは、やっぱり、僕のいう意味での「なる」とは違うんだけど、むしろ、なんていうのかな、そういう意味での、あなたのおっしゃるような意味での「なる」ということは、僕はむしろ避けたい方だね。何故かかっていうと、何故避けたいかということ、それこそ第2接面が見えなくなっていくって事。で、つまり、やっぱり僕は「なる」ということは基本的には第一接面的な感じをつかむことと、第2接面的な世界がより多く見えてくることがつながっているというね、いわば、それが、何故それじゃ第2接面的な意味での理解がそこで介入してくるかっていう根拠になっているっていうことに、もう一人の他者がいるということなんです。モノローグではないっていうことですね。ところが僕はあなたの話を聞いていると、モノローグ的になっているんじゃないかっていうね、その危険を感じるのよね。だから、それは広がらないで、デラボレートはさかれてはいくんだけど広がっていない様な気がする。で、なんか僕自身がここで考えている「なる」というときには、やっぱりもう一つ第2接面的な世界の存在というのを気配として感じているというね。その気配として感じるっていうことは、そういう自分とは違う、自分の考えているのとは違うけれども自分がそこで発見しなければならぬ未知なるものunknownnessというものを絶えずそこでね、unknownなものというものに対してある種の構えていうのかな、受け入れていこうっていうね、そういうものを含んだものでなければいけないんじゃないかという感じがするのね。だからそこがなんか違うことはここではっきりしたけれども、だからといって、そっちがなんか正しいという風にはちょっと思いにくいのはね、そういう僕自身が本質的に考えている「なる」というときには、やっぱり、他者、それからもう一つそれを外側に含んでいるTHEY的な存在っていうものを、unknownとしては感じると。ただunknownが驚異、怖れではなくって世界だというね。そういう感じだと思うんで

すよ。だから、それを怖れとして感じているunknownnessというのかな、そういうものは、そうではなくていわゆる、もうちょっと敢えていうと、ホープとしてのunknownnessというのかな、希望としてのunknownness。つまり、自分は今知っている自分でないもっと本当の自分っていうものがありうるかもしれない。そういうものに対するホープを持つというね。そういう意味でのunknownnessというものに対して、開かれた気持ちというものを持ちながら、なっていくという。そういう事態の時には、いわゆるTHEY的と呼ばれていること自身に対する怖れもないというのかな。だから、THEY的なものを今度拒否するわけでもなく、それを無条件で受け入れるわけでもなくという、そういう感じが僕にはあるんだけどもねえ。

竹内

それは演技論からいうと、非常に高度な演技論でね。そこはある外からの目というものの訓練がないと成り立たない世界だという風に思うんですね。世阿弥のことばで言えば離見の見〔見物席から主演者が見〕ということになるが、スタニスラフスキーだと注意の圏という言い方もできる。第1の圏、第2の圏、第3の圏、ちょうどあれだね。第1の圏は自分と相手、あるいは対象になってるモノを含む圏、第2は舞台全体のひろがり、第3は劇場空間、観客全部をふくむ範囲。その三つのそれぞれに限定される集中の仕方がある。それが三つ重なっていなければならない、それがなかなかむづかしい。第1だけに集中してしまうと、佐伯さんのいわれる第2接面的な世界の存在が消えてしまう。しかし、その先で、私も事例を出してお考えを確かめたい気がします。私にこんな事があった。私にサングラスの少女と名付けるエピソードがあるんです。つまり中学時代から、どうしても嫌だと思ふことがあるんだけども、どうしても直せないって少女がいたんですよ。大学生ですけどもね。それはなにかっていうと、人からとってもいい人だといわれていてね、それで、これやってくれないって言われると、いいわよって言ってやってしまう。ところが本当はもう今度こそしたくないと思うんだけども、やっちゃうというわけですね。で、それをどうしたらいいんだろうということを質問されて、僕はそんなことは解らないけれどもと言って、その人の姿勢を見たわけです、そのしぐさを真似したわけです。つまりこれはある意味じゃあ外からみてるわけです。どこを見てるかっていうと、こう首がふっと前へでてね、こう顔がちょうどお面をかけてるみたいに空間に保たれていて、せい一杯まわりに注意を向けている。自分のからだか面の後ろから覗いて居るっていう感じがするわけですね。で、それをね、あなたを見ているとこういう感じがするとそこでやってみせたわけです。そしたらまわりの人が似てるっていうわけですよ。その後でサングラスをかけさせてみたら、その子が人の顔が見える、初めて、初めて人の顔が見えた、って言ったわけですね。今の話を聞きながら思いだしてたのは、外から見えるっていうのはなんだろうって事なんですよね。その身体の持っている、私



の言葉だと、志向性みたいなものを見ていくということなんですね。そうすると志向性みたいなものを見てるってことは、外から見れるんじゃないくて、もうすでに構造的に中に入っていることなんです。そういう形で見ていかないと、外から見るということ自体がなりたたない。人の場合の話ですが。-----という風な事を考えた。

佐伯

それはだから、なんて言うのかなあ、外からの見えを、私が最初に捉えた外からの見えっていうものと、それからいったん中に入って、中からもう一度外を、こうなんて言うのかなあ、こう外に自分自身を出して行くっていうね、その時の外とはだいぶ違う感じがするなあ。なんかね。

竹内

とすると、そこはもう少し考えてみないとわかりません。第一に、「[[外から]見る]」ということは、私と相手との間に成り立つ「こと」であって、人なら共同主観的な現象として現れてくること、という考え方が私にはあります。が佐伯さんのおっしゃる「外から見る」はいわば客観的な存在としてのモノを前提とされている。いわばTHEYの世界が既に想定されているように思われる。その違いを考えてみたいことと、その先で、「ものになる」ときに、深く入ってゆく、という言い方をされたのと、私流に志向性を感じるとということと、どう違うか重なるか、ということも考えてみたい。

佐伯

そうですね。なんかこう、内に向かうものをもう一回外へ出そうとするところがあるわけですね。それをこう言いたいわけなんですね。

竹内

それは、日本人には非常に難しいことだと僕は思います。

佐伯

なるほど。

竹内

自分の何十年の実感から言うと、ものすごく難しい。乱暴に言えば、山口先生のおっしゃったようなことはよくわかるんですね。あそこならすぐ入れるんです。だけどそれを特にTHEY的な世界とどう重ね合わせ、むしろTHEY的な世界を浮かび上がらせてゆくためにはどういう風に自分で支えて行くのかということがものすごく難しい。(苦笑)という風なことを思い浮かべる。

佐伯

そうだねえ。うん。

竹内

日本人は二項関係に閉じこもりやすい。THEYと一見思われるものも、実は<私>の拡大にすぎぬことが決定的に多いということ、身にこたえているものですから。佐伯さんのいわれるTHEYとは少し違う意味で、まず、真の第三

者が存在しないところでは「なる」ということは主観の投影だけに終ると思うのです。

佐伯

特に、最初の言った意味でのTHEYが、文化として妙に激しい環境に我々は生きてるわけですからね。で、それをとにかく拒否する。

竹内

切っちゃう？

佐伯

いえいえ、一遍ものすごくはっきりとした断絶というものを経験しない限りはね、再生は難しいでしょうね。だから、その意味じゃあ、養護の愛育の子供がそれこそ三年も四年も水をこらさずと、まさに水の世界にね、自分自身を本当に浸らせるというね、そういうことをやらないと、それこそ第2の、もう一つの外側ってところまでいかない。それは大変なことだと思いますね。

竹内

よくわかります。でなくては「なる」ことは成り立たない。しかしそれは、教師が障害児に「なる」ケースとしてはよくわかるが、子どもははじめからTHEYの世界がない、あるいはうすいだから、そこからTHEYまでゆくには少し違う筋道が考えられるのではないか、とは思いますが。

人の身に「なる」  
ことと「なったつ  
もり」の違いは？

市瀬

レベルをちょっと下げて、質問したいんですけども。あの、人の身になるということと、人の身になったつもりということの違いについて、どういう風に考えられていますか？

佐伯

うーん、それはなんていうのかなあ、ある意味でいえば、それこそ我々は人の身になったつもりということと、それが本当に人の身になってることなのかってということとはね、いつも違っている可能性っていうのを持ってないとね、それはどこまでいったって自分と相手とは違うわけだから。人の身にいくらなったとしたってそれは所詮、その人の身に本当の意味でなったことにはなっていないかも知れない。それは絶えずあるわけですよ。だから、常に我々は、思考をどこで止めるかっていう問題であって、あなたがおっしゃったのは、どちらも思考を止めてしまう働きをもつ危険性を持っている。人の身になっていないというところで止めてしまうのも怖いし、人の身になったというところで止めてしまっても怖いと。つまり、我々は絶えず「かもしれない」という中で生きてるし、で、絶えずそのやり直しということが起こっているんじゃないのかなあと、そんな風に思うんだけどね。

中野

なにか、いいたいことは？

市瀬



いや。(笑)

IがYOUを発見  
するのだろうか？  
それとも—



中堀

私いまここに先生が書いておられることですね、あなたと出会うという。非常に、あれと思って、まだよく理解していないと思うんですけども、まあ、IがYOUというのを発見していくというんでしょうか。なると見ていくという言い方をなされていたわけですね。だから、自分が、自分でないものを“あなた”として見ていくといいますか、そういう風なことが起こっていく。ま、これは発達のことからいえば、自分が気が付いたとき、母親はいてくれるというので自分というのが……。そういうことから自分が人のこう見るっていうふうなことも覚えているし、同時というんでしょうがね。でも、本当に“あなた”というのを見いだすっていうことができるのはですね、あなたがわたしをそういう風にみてくれたときに、はじめて私もそんな風なことが出来るようなことがあるんじゃないかなあと思うんですね。ですから、ここをこうおきましたけれども、ま、それであっちに回ってみると、それが私をどう見ているか、あるいはTHEYをどう見ているかっていうことで、また局面が第1第2でこう変わってくるっていうことがあるんでしょうけども、なんか、その辺がですね。あの、この間、北森先生、神学者のあの先生が旧約聖書の出エジプト記を講解しておられて、そこのテーマというのがですね、「外を内に包む」いわゆる外ってのは人間のことで、神が内で。ところが、モーゼっていうのは、その中間にあって、内になってその神っていうのを今度は包んだり出したりという風な、そういう構造で語られているんですね。でやっぱり、自分が包まれる、ま、そこの神が、内が外をいれるっていうのは、すごく痛みがあることで、そこに神の痛みがあるんだというようなことをいって、そこに北森先生の神の痛みの神学っていうのがあるんですが。そういう風なことが、やっぱり先生の考えておられるところとなんか関連があるのかなあというようなことを僕はちょっと思ったんですね。で、そういう風に私が見られて、お前という風にみられたときに、私というのが生まれくるというのか、まあ、そんな風なことをちょっと思ったわけですけども。

佐伯

まあ、実際問題だから、愛育養護学校なんかの場合はだから、はじめは、まったく片思いですよ。先生の方からの。つまりぜんぜん理解されていないわけですよ。敵だ として扱われるわけですよ。だからものすごい、こう反抗的になったり、排他的になったりっていうそれは、やっぱりさっきから言ってるその存在そのものを肯定してあげるっていうね、あなたはどうかであったとしても、存在してること自身がいいことなんだっていう肯定をとにかく持ち続けるっていう、何年も何年もかかるわけですね。だけど、そこをやらないと次が生まれないっていう、その信念でやっていくわけですよ。だから、ある意味で、最初の母親のYOUというものの、本当の意味での出会いや発見を全て

の人が持っているとは限らない。そういう中でYOUを再発見していくっていうプロセスっていうのは、まずYOUが、本当にYOUとして働く人がいなきゃいけないということは確かだと思うんですよ。ただ、それがね、それがただ受け入れられることによってYOUがわかってるかというとしてそうではなくって、僕が言いたかったのは、実は人が「YOUになる」ということを学ぶ。つまり自分が他者にとってのYOUになっていくということと、YOUを発見することとがね、一緒に成立してくるというね。だから、ちょっとなんかなかったときに人にちょっとサービスするとか、なんか相手に心を配るということをこっちからやり始めることによって、やっている存在との出会いが生まれていくんでね。だから、どっちが先といえば、とにかくYOU的な存在がなきゃいけないことは確かなんですけどもね。それを一方的に取り入れることが、YOUの発見かっていうと、そうでもなくてYOUは作りだされもするし、発見もされるという両面があるように思うんですよ。こちら側からYOUになろうという動きと、それからYOUという存在の本当にそこで働きかけてくれることとのその両方の作用でもって、始めてYOUというものが、そこにまさに存在するようになるという、そういう感じですね。

#### 西洋科学知の方法と擬人法的知の方法の関連



まどか

科学論というか知識論というところでちょっとおたずねしたいんですけども。もし物になって、物を考えるという擬人的認識っていうんですか、そういうことが、先ほどもでていた、日本人の問題とか、東洋的な「知る」ということなんだとかですね、あるいは、「知る」ということによる喜びにもなっていくんだという、非常に東洋的な特徴がまずあるのかないのかっていうことです。あの、何故こんな質問をするかという、今までのそういう科学とか学問とか、その教育制度とかいうのが、かなり西洋型できづかれていると思うんですが、こういう人間関係論とか、私は命、生命科学とか生命倫理みたいな、かなり文化と学問との接点が必要な領域をやっておられますと、どうしても日本人が喜ぶ認知の仕方があるんじゃないかという疑問を持ってるんですよ。で、そうすると、例えば神を知るという信仰の問題とか、人を知るということとか、あるいは自分を知るという広い意味での学問というか、科学っていうこととか、それから物を知るという事から出てきた物理中心的な勉強の仕方とか、そういうことの制度化っていうのが、がらっと問い直されるというか、変わっていくということに、この擬人的認識ということが関連してるのかどうかっていうことをちょっとお伺いしたいんですけども。

佐伯

なんていうのかな、突き詰めるとね、本当にラディカルに変わってきちゃうことはあると思うんですよ。例えば、それこそ植物についての考えとかそういうものが、我々はそれこそ非常に身体みたいな感じで植物をね、それこそ中国の薬草を見つけるなんてのも、身体としてみてる、植物をね。なんか生き生き

として、本当にそのひとつひとつが、いわゆる自分の身体として、その植物を分類したり、見たり、心臓だやれどこそこに関係あるだろうなんて、みんな本当に擬人ですよ。徹底して擬人というものを広げながら植物を考えていく。それに対して、もう向こうの分類学的なあれとはおおよそ違うといえば違うわけですよ。だから、突き詰めれば、かなり違ってくるという所はあるんですけども、ただ欲を言い出すと切りがないんだけど、ある意味じゃあ、妥協という大変ですけども、少なくとも、彼らの中にも、そういう様な感じっていうものをね、やっぱり科学者であれなんなれ、プライベートにね、自分の構想を練るようなときっていうのはやっぱり何かそれに近いものがあるんじゃないかって思うわけですね。ただそれを、学問のルールにしたがった言い方をされると全然ちがっちゃうんですけども、思い付いたり、それからほっと何気なく実感を持って味わったりするっていうプロセスはやっぱりそういうところがあると思うんですよ。それを彼らはいい方を知らないし、そういう事を言っているとも思っていないというところがあるために、我々と違う科学を出してきてるだけでね、その辺のところをだから、お互いにむしろ彼らとインタラクションを持つことによって、逆に、ときはなつとか、そういう可能性もあると思ってるんですけどもね。だから、そういう事を我々が遠慮して言わなかったし、だからといってまた強気で言うのも、あなた方と私達とは違うんですという形で強気で言ってもしょうがないんでね。僕は基本的なところでは、あなたもやはりこういう所あるんじゃないの、っていうかたちで、僕なりに物理や数学やなんかのいわゆる Scientific knowledge についてのね、そういう自分自身の視点を動かしたり、自分自身が何かになってみるっていうことをつきめるとね、やっぱりそこは本質的には違うということになったとしても、ま、ともかくそういう事を公に語り合っていくようなことを僕なりにやって行きたいと思っているんですけどね。

中野

とても刺激的な話を、長時間に渡ってありがとうございました。皆さまもどうもありがとうございました。

